

# 同志社日本語研究

第20号 別刷

---

特集 蜻蛉日記全用語全事例辞典

蜻蛉日記全用語全事例辞典 起稿 .....	石井 久雄 (1)
蜻蛉日記の用語	
動詞「きこゆ(聞)・まうす(申)」 .....	入江さやか (19)
名詞「すゑ(末)」 .....	森 あかね (31)
名詞「め(目)」 .....	城阪 早紀 (42)

---

2016年3月

同志社大学大学院日本語学研究会

同志社日本語研究 第20号 別刷

2016年3月

同志社大学大学院日本語研究会

# 蜻蛉日記全用語全事例辞典 起稿

いしい ひさお  
石井 久雄

同志社大学文学部

## キーワード

蜻蛉日記, 全用語, 全事例, 辞典

### 1 蜻蛉日記全用語全事例辞典

1.1 蜻蛉日記全用語全事例辞典は、蜻蛉日記に現れたすべての自立語について、現れた意味用法をすべて記し、意味用法ごとにすべての事例を挙げる。

1.2 意味用法の記述は、一般の辞典の記述を意識しつつも、蜻蛉日記の事例に即して具体的である。蜻蛉日記に限定される記述であると批判されることを厭わない。

とはずがたりについても、同様の辞典作成を先に進めていて、本誌18号（2015年）特集「とはずがたり全用語全事例辞典」、特に「起稿」（pp. 1-10）を参照されたい。このような作業が他の作品でも積み重ねられ、その上で、意味用法の一般的記述方法が議論されて、新たに辞典が編集されることを、期待する。

### 2 蜻蛉日記

2.1 蜻蛉日記の本文は、

木村正中・伊牟田経久校注・訳

『新編日本古典文学全集 13 土佐日記 蜻蛉日記』（1995年、小学館）

による。

2.2 本文をこれによるということは、本文の意味解釈もこれによるということである。

他に異なる解釈があることもあるが、基本的には木村・伊牟田のものによる。

2.3 この本文が古典仮名遣によっているところ、この辞典では見出しに拗音の小字「ゃゅょ」を用いる。

### 3 見出しおよび記述・挙例など

3.1 見出しは、一般の辞典と大きくは異ならないが、ある語句が繰り返して共起するなど、特徴が見られるときには、積極的にまとめて小見出しとする。

3.2 意味用法の記述は、一般的な意味用法については簡略にとどめ、特徴的であることがらを気付く限り取り上げる。

記述が事例個個に及ぶときには、事例に a・b・……の符号を付し、下記3.4の所在表示の前にその符号を置く。

なお、「木村伊牟田」として、上記 2 の木村・伊牟田の注記・訳に特に基づくこと

を示す。

- 3.3 意味用法の記述の項目を設けるごとに、事例数を示す。意味用法の出現の分量を知るためである。

項目ごとに事例をすべて掲げる。事例の配列は出現順による。

- 3.4 各事例の初頭に、所在する

巻(ラテン数字)・ページ(アラビア数字)・行(ピリオドを置いてアラビア数字)を示す。巻のラテン数字というのは、Ⅰ上巻・Ⅱ中巻・Ⅲ下巻・Ⅳ巻末歌集である。

本文の引用中での当該の語句は、開始位置を ○ で示し、引用の長さは、意味用法が了解できるように心掛ける。

本文の引用中で < > に括ったものは、脈絡などについての注記である。歌の初頭には記号 √ を置く。

- 3.5 宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉『日本古典対照分類語彙表』(2014年、笠間書院)に、「古典語彙表」として言及することがある。しかし、蜻蛉日記についてのその数値は、自立語の異なり3,599・延べ22,400をはじめとして、この辞典と必ずしも合致しない。古典語彙表が佐伯梅友・伊牟田経久『かげろふ日記総索引』(1963年、風間書房)に依拠して、その本文と上記2.1の本文とに差異があるためであり、また古典語彙表が巻末歌集の用語を取り上げないためである。

- 3.6 本稿は辞典のうちの動詞「ものす」についての試行である。完成品では、脈絡の説明を簡略にすることになるであろう。また、空見出しを立てて、事例を参照先に送るといった措置をとることになるであろう。本稿は、そうした整理をする前のままの姿をとどめる。

なお、「ものす」のほかにも、後に幾つかの項目を示す。適当に取り上げていて、相互に関連させることを図ってはいない。

## 4 作成経過

- 4.1 この辞典を作成するために事例の整理等に当たった者は、次のとおりである。身分は、この研究を本格的に開始した2013年4月当時である。

石井 久雄 石田 裕子 入江さやか (以上、同志社大学教員)  
牧野さやか (大谷高等学校<大阪市>教員)  
城阪 早紀 丸山健一郎 森 あかね 吉岡真由美  
(以上、同志社大学大学院生)

- 4.2 このメンバーは、辞典に関係するものとして、次の論考を公表した。

宮島 達夫・鈴木 泰・石井 久雄・安部 清哉  
(2014) 日本古典対照分類語彙表。笠間書院。特に展開の部。  
入江さやか (2016) 『とはずがたり』における「思ひ」の意味・用法  
——『蜻蛉日記』と比較して。

また、次の口頭発表を行った。

石井 久雄 (2013) 多義語における意味の出現の定量。

計量国語学会 第五十七回大会，

2013年9月28日，首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス。

石井 久雄 (2014) 古典語彙の出現頻度の分布

——『日本古典対照分類語彙表』を利用して。

語彙研究会 第100回定例研究会，

2014年5月24日，愛知学院大学大学院サテライト。

本誌のこの特集は，成果公表として，これらに続くものである。

- 4.3 辞典を作成するために，これまで，次の JSPS科学研究費，特に最後のものに，経費の面で多くを支えられた。今後，その成果を引き継ぎつつ，辞典の完成までになお相当の時日を必要とする。

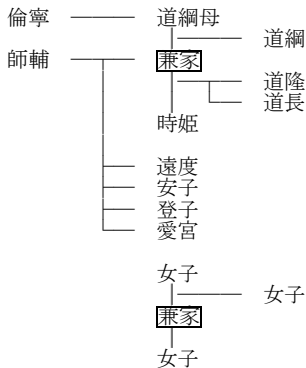
2008～2009年度挑戦的萌芽研究「古典文芸作品の用語の語義別出現頻度に関する調査研究」（研究代表者 石井久雄，課題番号 20652033）

2010～2012年度基盤研究(C)「とはずがたり全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究」（研究代表者 石井久雄，課題番号 22520478）

2013～2015年度基盤研究(C)「蜻蛉日記全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究」（研究代表者 石井久雄，課題番号 25370531）

蜻蛉日記系図

脈絡を注記する際に，次の人物については説明を省く。



蜻蛉日記に登場しない。

村上天皇皇后。  
貞観殿尚侍。村上天皇の寵を受ける。

志賀山麓に住む。遠い縁戚に法師がいる。  
道綱母養女となる

町小路に住む。

ものす〈物〉動詞，サ行変格活用。する。 —229例

種類の意味用法があり，具体的にどのような行為であるかという意味内容は脈絡に支えられる。「ものす」は，口頭語的であり，一定の語意をもたず，前後の事情ないし前後の叙述との関係で意味をなす。」（木村伊牟田pp. 94-95）書状のうちにも，発話のうちにも，地にも見られ，ただ，和歌には見られない。

蜻蛉日記を特徴づける一語である。古典語彙表によれば，出現頻度228＝比率1.01%，出現順位12＝上位0.33%であり，古典語彙表別冊・宮島「古典語の統計と意味」は，キルガリフの特徴度で蜻蛉日記の第1位を「ものす」とする（p.9）。

意味用法および事例件数の概要は，次のようである。自動・他動を示さないが，自動性が強いものを先に置き，また行為・動作の具体的なものを先に置く。

- |                                   |      |
|-----------------------------------|------|
| 1 来る。                             | —46例 |
| 1・1 発話者がいるところに来る。来訪する。            | —38例 |
| 1・2 帰って来る。戻る。帰ることに重点がある。          | —4例  |
| 1・3 特に，参籠から戻る。下山する。               | —4例  |
| 2 行く。                             | —58例 |
| 2・1 訪ねて行く。出かける。                   | —34例 |
| 2・2 帰って行く。                        | —5例  |
| 2・3 出立する。                         | —3例  |
| 2・4 到り着く。                         | —3例  |
| 2・5 特に，参詣・参籠に出かける。                | —13例 |
| 3 いる。存在している。状態である。                | —9例  |
| 4 書状として書いて送る。                     | —35例 |
| 4・1 目的語として「文」「返りごと」が明示される。        | —12例 |
| 4・2 目的語が明示されず，「書く」などが先行し，送る意味が強い。 | —6例  |
| 4・3 目的語も動詞もなく，書状の引用を受け，書き送る意味を担う。 | —17例 |
| 5 歌を詠んで送る。                        | —14例 |
| 5・1 送ることを前提として歌が詠まれる。             | —12例 |
| 5・2 送る意味をもたない。                    | —2例  |
| 6 物を送り届ける。                        | —5例  |
| 7 言う。                             | —21例 |
| 7・1 口頭で言う。話す。                     | —17例 |
| 7・2 口頭であるか書状であるかにかかわらず，意向を伝える。    | —4例  |
| 8 する。執り行う。                        | —13例 |
| 9 そのほか                            | —18例 |
| 連語                                | —10例 |

以下，ここに挙げた意味用法の順序で事例を列挙する。脈絡などを注記するに当たって，道綱母に関係する「道綱母が」「道綱母邸へ」などは，多く省く。

1 来る。 —46例

「来る」「行く」「出かける」のどれに当たるかは，行為者あるいは発話者のたちばによって変わることがある。例えば1・1 b I 140.12は，兼家が自邸に道綱母を招きたいと道綱母邸で言っていて，兼家が心理的に自邸から見て「来る」でも，現実に今いる道綱母邸から「行く」でもありえ，木村伊牟田注は双方の可能性を示しつつ，訳は「邸に来ていただきたいのだが」を採る。

1・1 f II 249.01「京にものす」は，京にいる発話者から見て「来る」「出かけてくる」であり，行為者から見れば「出かける」である。1・1 h III 290.06・i III 290.07は，発話者が出発前に思ったものとしては「行く」であり，到着した後の場所で「来る」となるが，iで出発前について「来なむなど思ひつつつ」とするので，出発前のことも到着後のたちばから語っているであろう。

などなど。逆に、別の項目に配置してあってもこちらに移しうる事例も、あるであろう。

1・1 発話者がいるところに来る。来訪する。

—38例

到着点は、例えば a I 138.13 「ここに」のように、「…に」で示される。

「…にもものす」で「…のために来る」を意味した事例があり、c II 188.14・d II 212.10・e II 244.11である。

- I 094.12 あるやうありて、しばし旅なるところにあるに、〈兼家が〉○ものして、  
I 097.14 とばかりあるほどに、〈兼家が〉○ものしたためり。  
I 104.10 …など、思ひつづくるをりに、〈兼家が〉○ものしたる日あり。  
I 117.15 例のほどに〈兼家が〉○ものしたれど、  
I 131.08 人〈兼家が、道綱母の母親の死を〉聞きつけて○ものしたり。  
I 133.01 〈母親の没後〉かくてあるほどに、〈兼家は〉立ちながら○ものして、日々にとふれど、  
a I 138.13 〈姉の家に来ていたところ、道綱母邸から使いが来て〉「とく渡りね。ここ〈道綱母邸〉に〈兼家自身が〉○ものしたり」と〈兼家からの伝言として〉あれば、  
b I 140.12 おの〈兼家自身〉がさかしからむときこそ、いかでもいかでも〈兼家邸に道綱母を〉○ものしたまはめと思へば、〈道綱母邸で、道綱母への兼家の発話〉  
I 143.05 夜うち更けて、護身にとて〈兼家が道綱母の部屋に〉○ものしたれば、  
I 165.03 〈初瀬参詣の帰路で〉「このごろの綱代御覧ずとて、〈兼家の叔父が〉ここになむ○ものしたまふ」と言ふ人あれば、  
I 165.06 かう〈この地に道綱母の一行が〉○ものしたまふと〈兼家の叔父自身が〉聞いて、〈兼家の叔父が道綱母の一行に贈り物をした、その添え状。〉  
II 174.10 〈兼家は〉例のやうにも通はず、新しきところ造るとて通ふたよりにぞ、〈病気をした道綱母のところ〉に立ちながらなど○ものして、「いかにぞ」などもある。  
c II 188.14 これ〈道綱〉がいとらうたく舞ひつること〈兼家自身が〉語りになむ○ものしつる。〈兼家の発話〉  
II 189.04 その日になりて、まだしきに〈兼家が〉○ものして、  
II 204.08 〈道綱母の石山参詣を〉追ひて○ものしたる人〈某〉もあり。  
d II 212.10 引入〈道綱の元服の加冠〉に源氏の大納言〈源兼明〉、○ものしたまへり。  
II 213.07 こと〈大嘗会〉はつる日、夜更けぬほどに〈兼家が〉○ものして、  
II 228.02 いにしへ〈兼家と〉もろともにのみ、時々は〈ここ鳴滝に〉○ものせしものを、  
II 233.14 京より、叔母などおぼしき人○ものしたり。〈道綱母の鳴滝参籠の場に来た。以下 g II 251.13まで同じ。ただし f II 249.01を除く。〉  
II 236.04 日ごろ○ものしつる人〈叔母〉、今日ぞ帰りぬる。  
II 236.15 わがもとのほらから一人、また人〈某〉もろともに○ものしたり。  
e II 244.11 その暮れてまたの日、なま親族だつ人、とぶらひに○ものしたり。  
f II 249.01 まづは、この大夫〈道綱〉のまれまれ京に○ものしては、日だにかたぶけば、〈母が籠る〉山寺へと急ぐを見たまふるに、〈道隆からの発話〉  
g II 251.13 申の時ばかりに〈兼家が〉○ものせしを、火ともすほどになりけり。  
II 253.03 このひとつ車にて〈兼家および道綱母とともに道綱母の家に〉○ものしつる人〈妹〉の  
II 255.10 客人ぞ○ものしたる。ここちのむつかしきにと思へど、  
II 267.09 昨夜は、人〈客〉の○ものしたりしに、夜の更けにしかば、〈兼家からの書状〉  
h III 290.06 宵よりまりり来まほしうてありつるを、をのこども〈家人たち〉も、みなまかり出にければ、〈兼家自身が道綱母邸へ〉え○ものせで、〈兼家の発話、次例へ続く〉  
i III 290.07 昔ならましかば、馬にはひ乗りても〈道綱母邸へ〉○ものしなまし、…、なにばかりのことあらば、かくて来なむなど思ひつつ寝にけるを、〈前例から続く、兼家の発話〉  
III 316.03 「〈兼家自身は〉相撲のことに、内裏にさぶらひつれど、こち〈道綱母邸へ〉○ものせむとてなむ、急ぎ出でぬる」〈兼家の発話〉  
III 330.03 ただことばにて、「〈道綱母自身が〉侍らぬほどに〈速度が〉○ものしたまへりける、かしこまり」など〈道綱母から速度への詫びとして〉言ひて奉れて後、

- Ⅲ330. 07 <速度が>助<道綱>に「もの聞こえむ」と言ひがてら、暮に○ものしたり。
- Ⅲ333. 02 <速度は道綱母邸へ>来そめぬれば、しばしば○ものしつつ、
- Ⅲ335. 05 さて、その日ごろ選びまうけつる二十二日の夜、<速度が>○ものしたり。
- Ⅲ337. 14 「…<道綱と>もろともに寮に、と聞こえになむ」とて、<速度は道綱母邸の>門に○ものしたり。
- Ⅲ338. 11 その暮に、<速度は>また<道綱母邸へ>○ものして、
- Ⅲ345. 07 <速度>みづからは<道綱母邸へ>○ものせず。
- Ⅲ349. 13 「<速度邸へ>さまかはりたる<僧形の>人々○ものしはべりしに、日も暮れてなむ、…」  
<速度からの書状>
- 1・2 帰って来る。戻る。帰ることに重点がある。 — 4例
- a Ⅲ285. 01は、「連れて」帰ることを意味するかもしれず、そのばあいは他動性があることになる。
- Ⅱ188. 12 夜更けて、送り人あまたなどして<道綱が道綱母邸に>○ものしたり。
- Ⅱ198. 14 「これ<この書状を兼家が>見たまはざらむほどに、さし置きて、やがて○ものしね」と<道綱に>教へたれば、「さしつ」とて帰りたり。
- Ⅱ211. 04 こなた<道綱母の家>ざまに○ものしたまふべき人のさるべき<某>に、
- a Ⅲ285. 01 いととく<志賀山麓の女のところからその娘を連れてこの道綱母の家に>○ものせよ。  
<道綱母から道綱への指示の発話>
- 1・3 特に、参籠から戻る。下山する。 — 4例
- a Ⅱ250. 04は、参籠した人の下山でなく、下山を勧めに来た人の行為であって、帰って行く意味であるが、便宜、ここに置く。そのa「ものせられぬ」について、木村伊牟田注は「「られ」は広義の受身。前例中の「言はる」・この「ものせらる」を、倫寧に対する尊敬ととるのが通説であるが、この場面では「ものす」が多用され、すべて道綱母の下山にかかわる。これも、明日迎えに来ると念を押して帰る父の行為を、受身の作者の側から表現したもの。」とし、訳は「山を下りられてしまった」とする。
- Ⅱ249. 10 さらむ<下山の勧めを断わる道綱母を世間も兼家も見捨てた>後に○ものしたらむは、  
いかが、人笑へならむ <某からの書状>
- Ⅱ250. 01 「…、この君<参籠に連れてきた道綱>、いと口惜しうなりたまひにけり。<道綱母は>  
はやなほ○ものしね。<倫寧の発話、次例へ続く>
- Ⅱ250. 02 今日もし日ならば、もろともに○ものしね。<今が不都合ならば>今日も明日も、迎へに  
まらむ」など、うたがひもなく<倫寧に>言はるるに、<前例から続く>
- a Ⅱ250. 04 「さらば、なほ明日」とて<父倫寧に>○ものせられぬ。
- 2 行く。 — 58例
- 2・1 訪ねて行く。出かける。 — 34例
- a Ⅱ181. 11・c Ⅱ258. 05は、参詣する意味を含むように思われる。
- I 100. 12 例の<町小路に住む女の>家とおぼしきところに<兼家が>○ものしたり。
- I 124. 09 雨間に例の通ひどころに<兼家が>○ものしたる日、
- I 127. 08 ほど経て河原へ<道綱母が>○ものするに、<兼家と>もろともなれば、
- a Ⅱ181. 11 <兼家が>御嶽にとて急ぎ立つ。幼き人<道綱>も、御供にとて○ものすれば、<道綱母は>  
とかく出だし立ててぞ、
- Ⅱ192. 07 世の中いと騒がしかなれば、<兼家自身は>つつしむとて、<道綱母のところ>にえ○もの  
のせぬなり。<兼家からの書状>
- Ⅱ211. 03 まづ殿<兼家邸>へとて<道綱が>○ものしたりければ、
- Ⅱ217. 14 夜さり<兼家自身が道綱母邸へ>○ものせむに、いかならむ。<兼家の発話>
- Ⅱ225. 08 <道綱母の>住み所、いと便なかりしかば、<兼家自身は>え○ものせず。<兼家からの  
書状>
- Ⅱ227. 03 幼き人<道綱>の「<道綱母は鳴滝に>ひたやごもりならむ。消息聞こえに」とて、<兼  
家邸に>○ものするにつけたり<伝言した>。



- II 232. 05 「…、兼家邸に立ち寄って御門の辺にて御気色も聞かむ」とて道綱が○ものすれば、
- II 238. 02 『ささして道綱母に下山を説得しようと兼家自身が○ものしたりしかど、道綱母は出でずなりにき。兼家の使者が伝えた兼家の発話。この「ものしたりしかど」を木村伊牟田訳は「出向いたが」とする。以下、b II 238. 04まで一連である。>
- II 238. 03 また○ものしたりとも、さこそあらめ。
- II 238. 04 おのが○ものせむには道綱母は下山しない、と思へば、
- b II 238. 04 え○ものせず。使者がのぼりて道綱母をあはめたてまつれ。…』>以上一連で、使者が伝えた兼家の発話。この「えものせず」を木村伊牟田訳は「行く気になれぬ」とする。>
- II 249. 10 兼家からの下山の指示に従わなければいとつべたましきさまになむ、世人も思はむ。またはたくりの迎えには兼家も、よに○ものしたまはじ。兼家からの書状
- II 255. 13 大夫道綱、「兼家が道綱母邸に来ないのはなにごとによりてにかありけむと、まゐりて聞かむ」とて道綱が兼家邸へ○ものす。次例の報告へ続く>
- II 255. 15 「…『兼家自身はにはかに、いと苦しかりしかばなむ、道綱母邸にえ○ものせずなりにし』となむ兼家はのたまひつる」とて道綱が言ふしもぞ、前例から続く>
- II 257. 06 兼家は一夜のことども、しかじかと言ひて、「今宵だにとて急ぎつるを、忌たがへにみな人家人たち○ものしつるを、出だし立てて、…」など…、さりげもなく言ふ。
- II 257. 08 「知らぬところに○ものしつる人々家人たち、いかにとてなむ」とて兼家は兼家邸へ急ぎぬ。前例を受ける>
- c II 258. 05 初瀬では人いと多く、きらぎらうて○ものすめり。
- II 263. 05 「…例のところ道綱母邸に道綱母はいるか、ただいま兼家自身が○ものす」など兼家からの書状にあれば、
- III 280. 06 兼家から志賀山麓の女に返りごとなどすめりしほどに、兼家はみづからふたたびばかりなど○ものして、道綱母から某への発話、次例へ続く>
- III 280. 07 いかでにかあらむ、単衣のかぎりなむ、取りて○ものしたりし。道綱母から某への発話、前例から続く>
- III 282. 07 またの日といふばかりに、志賀山麓の女のところへ法師が山越えに○ものしたりければ、木村伊牟田注に「以下、「けり」を用いて叙述が進められる。後で人に聞いての描写だからである」とする。>
- III 291. 01 紫野どほりに、北野に○ものすれば、沢にもの摘む女わらはべなどもあり。
- III 298. 04 また知足院のわたりに○ものする日、大夫道綱もひきつづけてあるに、
- III 301. 07 今日ぞ、大夫道綱につけて兼家から文ある。「…」などぞある。返りごと、またの日道綱が兼家邸へ○ものするにぞつくる。
- III 337. 11 「助の君道綱、速度自身は今日人々のがり○ものせむとするを、もろともに寮に、と聞こえになむ」速度から道綱への発話
- III 338. 09 助道綱はひとつに乗りて速度の車に同乗して○ものしぬ。他注は「速度が道綱と同乗して」>
- III 339. 07 助道綱を明け暮れ速度が呼びまとはせば、つねに道綱は○ものす。
- III 344. 12 頭の君速度、「手番に道綱が見物に○ものしたまはば、速度ももろともに」と書状であり。
- III 344. 14 しきりに、「おそし」など速度が言ひて人使い来れば、道綱は○ものしぬ。
- III 345. 14 雨いたう降りぬ。夜さへかけてやまねば、道綱は速度邸へえ○ものせで、
- III 348. 12 例の、速度のところではなにごともありとて、道綱が速度邸へ○ものせぬほどに、文あり。

## 2・2 帰って行く。

— 5例

a I 140. 03・b I 141. 09は、兼家が道綱母邸から自邸に帰ることに関係する。bは、構文上では道綱母の兄の行為になり、帰ることにならず連れて行くのみの意味であるが、兼家を兼家邸

に連れ戻すので、帰る意味も重なると思われる。c II 231. 02は、参籠を切り上げて帰宅せよという兼家の指示に反発した発話であり、下山の意味も重なる。d II 263. 01は、道綱母が自邸に帰るのであるから、「行く「来る」について問題とならないか、むしろ「来る」であるかもしれない。

a I 140. 03は、行く先を「…へ」で示した稀な事例である。

- a I 140. 03 なにごともせむに、いと便なかるべければ、かしこ兼家自身の邸へ〇ものしなむ。  
〈道綱母への兼家の発話〉
- b I 141. 09 〈道綱母の兄が兼家の車に〉やがて乗りて、〈兼家を〉抱へて〈兼家邸へ〉〇ものしぬ。  
II 214. 01 供にありかすべきをのこどもなど、まゐらざめるを、かしこ兼家自身の邸に〇ものしてとのへむ。〈兼家の発話〉
- c II 231. 02 されど、「などでかさらに〇ものすべき」と兼家に言ひ果てつれば、
- d II 263. 01 われく道綱母もやがてく父の家から自分の家へ出でむと思ひつれど、人く侍女たちも困じたりとて、え〇ものせず。

## 2・3 出立する。

—— 3例

a II 227. 04・c III 345. 09は修飾「はやく「はやう」があって、aの木村伊牟田訳は「すでに立いたしました。」とする。cでは「出し立つ」で発言を受け、木村伊牟田訳は「早くお行き。…出かけさせる。」とする。b II 227. 14は修飾「まいて急ぎまさりて」があって、木村伊牟田訳は「なおいっそう気がせいて出発した。」とする。

- a II 227. 04 これくこの書状は書きおきて、はやくく道綱母が鳴滝に〇ものしぬ。〈道綱自身も〉追ひてなむまかるべき 兼家にこう言うように、道綱に母が教える。〉
- b II 227. 14 兼家から書状があって、鳴滝参籠に反対して…とあるを見れば、まいて急ぎまさりて〇ものしぬ。
- c III 345. 09 「はやうく遠度のところに〇ものせよ。ここにはく遠度に来られてもなにせむに」とて出だし立つ。〈道綱への発話〉

## 2・4 到り着く。

—— 3例

a I 138. 04は、「ものしぬべきこと」で用事の意味でありうるが、b I 139. 03と関係し、bでは用事の意味がないので、aもここに置く。そのa I 138. 04・b III 314. 14は、修飾「遠く「遠う」があってここに置くが、「行く」あるいは「出立する」の意味であるとも見える。

- a I 138. 04 あまたある中にも頼もしきものに思ふ人く姉、この夏より遠く〇ものしぬべきことのあるを、
- b I 139. 03 さて、昨日今日は関山ばかりにぞく姉が〇ものすらむかしと思ひやりて、
- c III 314. 14 「遠う〇ものする人く某」に取らせむ、この餌袋のうちに……」〈兼家からの書状〉

## 2・5 特に、参詣・参籠に出かける。

—— 13例

a I 098. 10は、木村伊牟田訳が「用事があって」とするが、注に「兼家の父師輔が法華八講のため叡山に登っているの、兼家もそれに同行したか。」とあり、ここでは注の推測に従う。

- a I 098. 10 横川に〇ものすることありて登りぬる人く兼家、
- I 126. 01 せばどころのわりなく暑きころなるを、例も〇ものする山寺へ登る。
- I 134. 14 寺へく母を連れて〇ものせしとき、とかう取り乱りしものども、
- I 149. 09 ものへ詣でせばや、…などさだめて、いと忍び、あるところに〇ものしたり。
- I 161. 05 人少なにてく初瀬に〇ものしにし、いかが。〈兼家からの書状〉
- II 193. 09 いかで…浜づらのかたに祓もせむと思ひて、唐崎へとて〇ものす。
- II 226. 05 なほしばし身を去りなむと思ひ立ちて、西山に、例の〇ものする寺あり、く次例へ続く
- II 226. 06 そち〇ものしなむ、かのく兼家の物忌果てぬさきにとて、く前例から続く
- II 260. 15 ただ水の声のいとほげしきをぞ、さななりと聞く。御堂に〇ものするほどに、こちわりなし。
- II 265. 02 去年もく命運をくころみむとて、いみじげにてく石山寺に詣でたりしに、石山の仏心をまづ見果てて、春つかたさもく侍女が言うように初瀬に〇ものせむ。〈侍女への発話〉
- III 308. 08 例の年よりも時雨がちなるころなり。十余日のほどに、例の〇ものする山寺に、く次

例へ続く>

- Ⅲ308.09 「紅葉も見がてら」と、これかれいざなはるれば○ものす。〈前例から続く〉
- Ⅲ320.06 「いざ」と誘ふ人もあり、「なにかは」とて、○ものしたれば、人多う詣でたり。
- 3 いる。存在している。状態である。 — 9例
- 脈絡によって具体的な内容に踏み込むこともでき、 a I 131.09「亡くなりました」・ b Ⅲ279.12「お育ちです」・ c Ⅲ279.14「お暮しとのことです」・ d Ⅲ282.06「お暮しです」・ f Ⅲ322.13「お過ごしですか」のようである。 e Ⅲ322.11は繫辞的であり、木村伊牟田訳は「叔父にあたる方でもいらしたから」とする。
- a I 131.09 <道綱母の侍女が兼家に道綱母の母親の死の様子を>「しかじかなむ○ものしたまひつる」と語れば、
- II 240.03 人<父倫寧>は、このごろ京に○ものしたまはず、<道綱母は相談したいことがあって>文にて、「かくてなむ」とあるに、
- b Ⅲ279.12 「殿<兼家>の通はせたまひし源宰相兼忠とか聞こえし人の御女の腹にこそ、女君いとうつくしげにて、○ものしたまふなれ。…。<某から道綱母への発話、次例へ続く>
- c Ⅲ279.14 いまは志賀の麓になむ、かのせうとの禪師の君といふにつきて、○ものしたまふなる」など<道綱母に>言ふ人<某>ある時に、〈前例から続く〉
- Ⅲ282.04 「…。そもそも、かしこに<志賀山麓の女の手許で>まぼりて○ものせむ<娘の面倒を見ていくことは>、<法師から道綱母への発話、次例へ続く>
- d Ⅲ282.06 世の中いとはかなければ、いまはかたちをもことになしてむとてなむ、ささのところ
- に月ごろは○ものせらるる」など<法師は道綱母に>言ひおきて、〈前例から続く〉
- e Ⅲ322.11 その寮の頭<速度>は、<道綱の>叔父にさへ○ものしたまへば、まうでたりける、
- Ⅲ322.12 「殿<道綱母邸>に○ものしたまふなる姫君は、<速度から道綱への発話、次例へ続く>
- f Ⅲ322.13 いかか○ものしたまふ。いくつにか、御年などは」と問ひけり。〈前例から続く〉
- 4 書状として書いて送る。 — 35例
- 4・1 目的語として「文」「返りごと」が明示される。 — 12例
- a II 246.03は、続く b II 246.11との関係では、書くことをもつぱら意味する。 c Ⅲ312.12は、木村伊牟田訳「手紙のやりとりは」であって、「文」が特定の一通でなく、行き交う全体であることになり、その遣り取りのしかたが道綱母に「おいづきてもあらずものなれた調子でもないし」と批評されることになる。 e Ⅲ327.14は、書く意味を助詞「とて」が吸収しているので、「送る」のみの意味であるが、 d Ⅲ327.09から続くので、ここに置く。
- II 200.08 <兼家自身が道綱母に>文○ものすれど、返りごともなく、はしたなげにのみあめれば、<兼家からの書状>
- a II 246.03 <某からの書状への>返りごと、思ひいたるかぎり○ものして、〈次例へ続く〉
- b II 246.11 「…<歌2首を含む>」など○ものしつ。〈前例から続く。前例の「返りごと」はここへも係る〉
- Ⅲ283.03 「さらば、<道綱母から>かしこ<志賀山麓の女>に、まづ御文を○ものせさせたまへ」<法師から道綱母への助言の発話>
- Ⅲ284.02 それより後も、ふたたびばかり<道綱母から志賀山麓の女へ>文○ものして、事さだまりはてぬれば、
- c Ⅲ312.12 大夫<道綱>、例の<大和だつ女の>ところに文○ものすること、おいづきてもあらず、
- Ⅲ275.12 …など、<兼家からの書状は>いとこまやかなり。返りごと○ものして、
- Ⅲ291.12 …など<兼家からの書状は>あべし。返りごと○ものして、とばかりあれば、みづからなり<当の兼家本人が現れた>。
- Ⅲ327.04 …となむ<兼家自身からは速度へ>言ひてしかば、<道綱母から速度への>返りごとは、はやうおしはかりて○ものせよ。 <速度への返書をどのようにするのがよいかと、兼家が道綱母から相談を受けて、その返事の発話>
- d Ⅲ327.09 さて、<速度からの書状への>返りごと、今日ぞ○ものする。〈次例へ続く〉
- e Ⅲ327.14 「…」とて○ものしつ。〈前例から続く〉

- Ⅲ351. 12 <速度からの書状への>返りごと、「…」と○ものしけり。
- 4・2 目的語が明示されない。動詞「書く」などが先行して、「ものす」の側は送る意味が強くなる。  
— 6例
- a Ⅱ232. 07は、動詞が先行せず、しかも目的語「文」があるが、「それにつけて」を受けて、持たせる・送ることをもっぱら意味する。続いてb Ⅱ232. 15があるので、ここに挙げる。d Ⅲ353. 07は、先行する「返りごと」に係るかもしれない。
- c Ⅲ349. 10は、動詞が助詞「とて」に吸収され、4・1 e Ⅲ327. 14はこれに並ぶ。
- なお、木村伊牟田訳が、使いを遣るのような表現である事例には、ここの注記として写す。
- Ⅱ203. 04 <兼家への返書を>「…」と書いて、○ものしけり兼家からの使いに持たせてやった。
- a Ⅱ232. 07 それ<道綱が兼家邸に出かけるの>につけて<兼家への>文○ものす。〈次例へ続く〉
- b Ⅱ232. 15 「…」など、細かに書いて、端に「…」と書いて、苔ついた松の枝につけて<兼家に>○ものす。〈前例から続く〉
- Ⅲ337. 06 <速度への挨拶として>「…<歌を含む>」と書いて○ものしたり<使いに持たせてやった>。
- c Ⅲ349. 10 「…」とて、これよりも<道綱母から速度へ>○ものしたりける<使いをやった>をりに、<速度邸では>法師ばらあまたありて、騒がしげなりければ、<使いは書状を>さし置きて来にけり。
- d Ⅲ353. 07 <兼家からの書状への>返りごと、問ひたる人の上ばかり書いて、端に「…」と書いて○ものしつ。
- 4・3 目的語も動詞「書く」もなく、直ちに書状の文面の引用を受け、書状として書く意味と送る意味とを担う。  
— 17例
- a Ⅱ249. 11は、書状の内容が名詞句「おなじことども」でまとめられもする。また、c Ⅲ341. 10は、書いていないのであるから当然に文面を欠き、内容「つややかなること」のみがある。
- b Ⅲ272. 12・d Ⅲ341. 15は、「返りごと」が先行するが、目的語とならず、4・1に置かない確認として示す。
- Ⅱ218. 01 <兼家に>「ここち悪しきほどにて、え聞こえず」と○ものして、思ひ絶えぬるに、
- Ⅱ221. 09 <兼家に>ただ「月も見なくに、あやしく」とばかり○ものしつ。
- Ⅱ225. 15 <兼家に>「…すべて、いままで世にはべる身のおこたりなれば、さらに聞こえず」と○ものしつ。
- a Ⅱ249. 11 京のこれかれのもとより、文どもあり。見れば、「…」と、人々おなじことどもを○ものしたるに、
- Ⅱ264. 04 <兼家に>「…『よそのくもむら』もあいなくなむ」と○ものしけり。
- b Ⅲ272. 12 <兼家からの書状への>返りごとに、「御前申しこそ、…あいなけれ」とばかり○ものしつ。
- Ⅲ283. 11 <道綱母が志賀山麓の女に>「…」など○ものしたれば、またの日、返りごとあり。
- Ⅲ293. 08 めづらしげもなければ、<兼家に>「給はりぬ」などつれなう○ものしけり。
- Ⅲ315. 04 いとをかしょうて、<兼家に>「…」と○ものしつ。
- Ⅲ316. 11 <兼家に>「聞こえさすべきこと」と、○ものしたれど、「つつしむことありてなむ」とて、つれもなければ、
- Ⅲ317. 05 <兼家に>「…見たまひなれにしところにて、いまひとたび聞こゆべくは思ひし」など、絶えたるさまに○ものしつ。
- Ⅲ334. 06 かれ<速度>より<道綱へ>「…」とのみ<道綱母をとりなす依頼として>あれば、<道綱母は謝絶しようとして兼家に>「…。御返り<を下さい>」と言ひたれば、<兼家から>「…」とあれば、<道綱母は>いとめやすきこちして、<速度に>「<兼家は>かくなむはべる。…」と○ものしたれば、<速度から>返りごともなくて、
- Ⅲ340. 09 <兼家に>「…」と○ものしたれば、<兼家から>「…」などあり。
- Ⅲ341. 05 <兼家に>「…<歌を含む>」と○ものしけり。
- c Ⅲ341. 10 <道綱母から速度へ>文の端つかたに、「…」と、かしこまりをはなはだしうおきたれ

ば、〈速度は〉つややかなることは○ものせざりけり。

d III 341. 15 〈速度からの書状への〉返りごとにも、「…」と○ものしたれば、たちかへりて、「…」とぞある。

III 350. 09 そのほかに、〈速度から〉「…」と○ものすべかめる〈言ってきたようである〉うちにも、

5 歌を詠んで送る。

——14例

5・1 送ることを前提として歌が詠まれる。

——12例

歌は、副詞「かく」によって後行させるものと、引用「…と」の形式で先行させるものがある。c III 271. 04・d III 271. 07およびh III 315. 09・i III 315. 14は、それぞれ、「かく」と「…と」との2形式で1首を挟む。

a II 174. 01は「…と」の形式により、ただし、直後の動詞「言ふ」と遣り取りしているのを参考にとすると、歌を詠むという意味は薄れているように思われる。f III 299. 14では、歌は動詞「書く」に関係し、「ものす」の意味は送ることに傾く。

b II 182. 14は、目的語「こと」をもつ事例であり、しかも反復する。木村伊牟田注は、「いふかひなきこと」の「こと」に、「「こと」は「言」で、歌の意。」とし、訳は二つとも「歌」とする。e III 292. 06の被修飾「こと」も、訳は「歌」である。そのeの「こと」は、同格で歌を導いていて、形式として特異である。g III 315. 06は歌を具体的には示さず、「かく」は、直後の「かうかう」とともに、歌を後行させるのに似るとも、書状に添えたという現場指示であるとも、見ることができる。

I 119. 15 〈兼家から〉使ひあれば、かく○ものす。√…

a II 174. 01 〈兼家からの書状への〉返りごとに、√…と○ものしたるものに対しての兼家からの返し、√…と言ふほどに、

b II 182. 14 〈道綱母が愛宮に長歌を贈り、愛宮は、返歌を詠んだが、届け先を間違ったことに気が付いて〉いふかひなきことを、またおなじことをも○ものしたらば、〈道綱母も取り違えを〉伝へても聞くらむに、いとねぢけたるべし、〈愛宮の心理が伝聞として記される〉

II 267. 15 「あまがへる」といふ名を〈兼家から〉つけられたりければ、かく○ものしけり。…√…とやうにて、

c III 271. 04 〈兼家に〉ねたさにかく○ものしけり。〈次例へ続く〉

d III 271. 07 √…と○ものしつ。〈前例から続く〉

e III 292. 06 たまさかに、これ〈道綱母〉より〈兼家に〉○ものしけること、√…

f III 299. 14 √…と兼家の妻およびその娘にあてた歌を〉書きて、〈薬玉の〉中に結びつけて、大夫〈道綱〉の兼家邸に〉まあるにつけて○ものす。

III 312. 13 〈道綱に〉かれ大和だつ女〉よりもいと幼きほどのことをのみ言ひければ、〈道綱は〉かう○ものしけり。√…

g III 315. 06 〈兼家が書状をよこして〉「…兼家自身が某に〉かくなむ○ものしたりし。返しかうかう」など〈歌を〉あまた書きつけて、〈道綱母に批評を求める。次例へ続く〉

h III 315. 09 劣り優りは見ゆれど、さかしうことわらむもあいなくて、〈兼家に〉かう○ものしけり。〈前例から続き、次例へ続く〉

i III 315. 14 √…とばかりぞ○ものしける。〈前例から続く〉

5・2 送る意味をもたない。

—— 2例

歌の配置は、a II 184. 08で後であり、ただし5・1の「かく」にあたる語句が見えない。b III 340. 06で、「…と」によって前である。

a II 184. 08 〈屏風歌を依頼されて〉宵のほど、月見るあひだなどに、一つ二つなど思ひて○ものしけり。〈以下に、詠んだ歌9首が屏風絵の説明とともに並ぶ〉

b III 340. 06 〈速度が持っていた絵を道綱が持ってきて、その絵に道綱母が〉√…と○ものして、〈道綱は絵を歌とともに〉持て帰りおきけり。

6 物を送り届ける。

—— 5例

事例の多くで道綱母から送り出し、c III 356. 05のみで兼家が道綱母に「届けて来た」。a III 318. 13・b III 319. 05は、間に1文を挟むが、連続して記されている。

- Ⅲ271.02 <兼家から>古き袍、「これいとようして<仕立て直してほしい>」など言ひてあり。…、これより文もなくして○ものしたれば、<兼家から>「これはよろしかめり。…」とあり。
- a Ⅲ318.13 二十余日に…、<兼家から>「これして」とて、冬の物あり、<書状が添えられていなかったが、事情は不明である>…。ありしものどもはして、文もなくして○ものしつ。
- b Ⅲ319.05 つごもりにまた、<兼家から使いがあって>「『これして』となむ」とて、…、下襲ある。…、とどめて、きたなげなくして、ついたちの日、大夫<道綱>に持たせて○ものしたれば、<道綱が帰って>「<兼家から>『いと清らなり』となむありつる」とてやみぬ。
- Ⅲ319.15 <倫寧への祝いとして>白う調じたる籠、梅の枝につけたるに、√…とて<歌を添えて>、帯刀の長それがしなどいふ人、使ひにて、夜に入りて○ものしけり。
- c Ⅲ356.05 <道綱が舞人に召されたところ、兼家から>めづらしき文ある。「いかがする」などで、いるべきもの、みな○ものしたり。

7 言う。

—21例

7・1 口頭で言う。話す。

—17例

- 別の積極的な行動に伴ったものもあり、木村伊牟田訳で別の行動を前面に出したのものとして、
- a I 131.11 「引きとめ」・b II 227.05 「お答えなさいよ」・c Ⅲ285.12 「聞く<質問する>と」・d Ⅲ286.11 「答えると」・e Ⅲ288.12 「尋ねると」・f Ⅲ288.14 「へらず口をたたきあった」・g Ⅲ330.13 「伝える」のようである。逆に「する」で訳したのものとして、i Ⅲ339.05 「<返事などを>すると」である。
- なお、書状で言っているかもしれないと思われるものもあり、h Ⅲ333.03である。
- I 111.01 これかれ<周囲の人たちが道綱母に>「<兼家に対して道綱母は>いと情なし、あまりなり」など○ものすれば、
- I 131.06 「あはれ、<道綱母が>いかにしたまはむずらむ」と、<道綱母に母親が>しばしば息の下にも○ものせられしを思ひ出づるに、
- a I 131.11 <道綱母の母親の死の弔いに訪れた兼家に>人<侍女>ぞ会ひて、「…」と語れば、<兼家は>うち泣きて、穢らひも忌むまじきさまにありければ、「いと便なかるべし」など○ものして<引き止めたところ>、<兼家は>立ちながらなむ<見舞っていった>。
- b II 227.05 「もし<兼家から>問はるるやうもあらば、<道綱は>『<道綱母は>これは書きおきて、はやくものしぬ。<道綱自身は>追ひてなむまかるべき』とを○ものせよ」とぞ、<道綱母は道綱に>言ひ<兼家のところに>持たせたる。
- II 229.04 <道綱母の>月ごろの御ありさま、精進のよしなどをなむ<道綱母の侍女が兼家の使者に釈明として>○ものしつれば、<使者は>うち泣きて、<兼家が使者をよこして道綱母の様子を聞いてきたので対応した、という侍女から道綱母への報告の書状>
- II 233.03 「<道綱母から兼家への>御文は、<兼家が>出でたまひにければ、をのこどもにあづけて来ぬ」と<道綱が道綱母に報告として>○ものす。
- II 248.02 <道隆が道綱母のところに来て挨拶をしたので、道綱母が>「…。さきざきの御不浄は、いかでことなかるべく祈りきこえむ」と○ものしたれば、<道隆は>歩み出でて、
- Ⅲ283.03 「さらば、かしこ<志賀山麓の女>に、まづ御文をものせさせたまへ」と<法師が道綱母に助言として>○ものすれば、「いかがは」とて、
- c Ⅲ285.12 <兼家は志賀山麓の女に自身の娘がいると知らなかったが、道綱母が養女として邸に迎えた場に、たまたま兼家が訪れたので、対面させようとして兼家に>「さは、見せてまつらむ。御子にしたまはむや」と○ものすれば、<兼家は>「いとよかなり。させむ。なほなほ」とあれば、われも、とういぶかしさに、<養女を>呼び出でたり。
- d Ⅲ286.11 <道綱母が養女とする娘について、兼家が>「もし、ささのところにとありと聞きし<娘か>とあれば、<道綱母は>「さなめり」と○ものするに、<兼家は>「…」とてうち泣かれぬ。
- e Ⅲ288.12 「などかは、さは告げざりし」と<兼家から道綱母に質問として>あれば、「さ聞こえたらましかば、いかがあるべかりける」と<応答・質問として>○ものすれば、「たがへこそはせましか」とあり。<次例へ続く>

- f III 288. 14 「思ふ心をも、いまよりこそはこころみるべかりけれ」など、なほもあらじに、誰も  
 <兼家も道綱母も減らず口として>〇ものしけり。<前例から続く>
- III 297. 05 <物忌みの>果つる夜しも<兼家が道綱母邸を訪れて>門の音すれば、<道綱母は拒んで>  
 「かうてなむ固うさしたる」と〇ものすれば、<兼家が>たふるるかたに立ち帰る音す。
- g III 330. 13 「…」と<道綱が>言へば、…「…」としのびやかに<速度が>言ふなれば、<道綱が母  
 の部屋に来て>入りて、「さなむ」と〇ものするに、「…」など<道綱母が>言へば、
- h III 333. 03 <速度は道綱母邸に>来そめぬれば、しばしばものしつ、おなじこと<道綱母の養女  
 への求婚>を〇ものすれど、<道綱母は>「…」と言へば、<速度は>「…」とて、かしか  
 ましう責む。
- i III 339. 05 その暮に、<速度が>またものして<訪れて>、「…」と、いとたとしへなくけざやかに  
 言へば、<道綱母は>それにしたがひたる返りごとなど〇ものして、<速度は>今宵はいと  
 とく帰りぬ。
- III 347. 02 みづから<速度当人の訪れ>なり。<速度は>例の…あれば、<道綱母は>「…」と言へば、  
 <速度は>「…」とあれば、いとをかしうて、<道綱母は>「…」など答へたれば、いとほ  
 がらかにうち笑ふ。さて、<道綱母は>…を思ひて、「…」と〇ものすれば、<速度は>  
 「…」とて、あまたたび責めらるれば、
- 7・2 口頭であるか書状であるかにかかわらず、意向を伝える。 — 4例
- a II 191. 15・b III 325. 15は説明を求め、c III 340. 10・d III 340. 15は説明を与える。ここの「も  
 のす」には、木村伊牟田訳を添える。
- a II 191. 15 まして、<兼家が来ないことを兼家に>これ<道綱母>よりは、なにせむにかは、あやし  
 とも〇ものせむ<言ってやることがどうしてできようか>と思ひつつ、暮らし明かして、
- b III 325. 15 <道綱母の養女との結婚について兼家の許可を得たという、速度からの書状を、道綱  
 母は受け取って>返りごと聞こゆべきを、まづ<兼家に>、これはいかなることぞと、〇  
 ものしてこそは<問いただしてからにしよう>、とてあるに、
- c III 340. 10 <道綱母の養女との婚儀について兼家は道綱母を通して速度に>程はさ〇ものしてしを  
 <話してあるのに>、<速度は>などかかかくは<時期を早めよう>とあらむ。<兼家から道綱  
 母への書状>
- d III 340. 15 <速度が>いとうるさくはべれば、『すべてここ<道綱母>には<速度が>のたまふまじき  
 ことなり』と<道綱母から速度に>〇ものしはべるを<言っていますのに>、<速度が>なほ  
 ぞあめれば、見たまへあまりてなむ。<道綱母から兼家への書状>
- 8 する。執り行う。 — 13例
- 具体的な行為は、目的語として具体名詞 a I 130. 09 「弔ひ」・d III 294. 10 「もの<食事>」・g  
 III 322. 10 「喜び」で表現される。また「…こと」「かく」などで表現され、e III 311. 06 「そのこ  
 と…とかう」で重なる。f III 319. 09 「…わざ」やb II 249. 13 「しづらすべくも」もあり、c III  
 282. 15・h III 334. 03で脈絡に委ねられる。なお、cを木村伊牟田訳は「取り計らう」とする。
- I 130. 08 『…この御後のこと<道綱母の母親の法事>を、人々の〇ものせられむ上にも、<道  
 綱母から兼家への依頼として、道綱の口上で兼家に伝えられる。次例へ続く>
- a I 130. 09 とぶらひ〇ものしたまへ』と<道綱は兼家に>聞こえよ <前例から続く>
- I 131. 14 かくて、とかう〇ものすることなど<母の葬儀のことなど>、いたつく人多くて、みな  
 しはてつ。
- II 177. 15 <道綱母自身の病気が>久しくしならば、かく<遺書を認めたこと>だに〇ものせざらむ  
 ことの、いと胸いたかるべければなむ。
- II 202. 15 世の人の騒ぐままに、<道綱母の母親の>盆のこと、年ごろは<兼家の>政所に〇ものし  
 つるも、<道綱母自身が死んでしまったら関係が>離れやしぬらむと、
- II 221. 13 つとめて、<兼家は>「そのことかのこと〇ものすべかりければ」と<自分の邸へ>急ぎ  
 ぬ。
- b II 249. 13 いかにせむ、<兼家の意向に反して道綱母は鳴滝から下山しないでいるが、兼家も>こ  
 たみはよにしづらすべくも〇ものせじと<有無を言わず連れもどそうとするにちがひ

- ないと>思ひ騒ぐほどに、
- c Ⅲ282. 15 <加賀山麓の女から法師へ、娘を道綱母の養女に出すことについて>「…さらば、ともかくも、そこあなたに思ひ定めて○ものしたまへくお取り計らいください」とありければ、
- d Ⅲ294. 10 <清水参詣で>もろともなる人のところに帰りて、もの<食事>など○ものするほどに、
- e Ⅲ311. 06 三月十五日に院の小弓<があり、その用意が>始まりて、出居などののしる。まへ<先手>、しりへ<後手>分きて装束けば、そのこと<用意>、大夫により<道綱のために>、とかう○ものす。その日になりて、…
- f Ⅲ319. 09 <父倫寧に子ができたので、道綱母は祝いをしようとしたが、>ことごとしきわざは、え○ものせず、ことほきをぞさまざまにしたる。
- g Ⅲ322. 10 <道綱は、任官したことについて>こかしこによるこび<お礼まわりを>○ものするに、その寮の頭、叔父にさへものしたまへば、
- h Ⅲ334. 03 もしく道綱母の養女に求婚する速度の御心かはらずは、八月ばかりに<婚儀を>○ものしたまへかし <兼家から道綱母への書状>
- 9 そのほか ——— 18例  
掲出順序はおおむね出現の順序により、意味用法の相互の関連は見ない。
- 9・・・ 乗る。 ——— 2例  
I 141. 05 <兼家が>こちいと重くなりまさりて、車さし寄せて乗らむとて、かき起こされて、人にかかりて○ものす。  
II 239. 11 <兼家からの使いが>かつうち泣きつつ、車に○ものすれば、ここなるこれかれ、送りに立ち出でたれば、
- 9・・・ 裁縫する。 ——— 1例  
II 192. 09 <兼家から仕立ての依頼があったが、>「このごろ、○ものする者ども里にてなむ」とて返しつ。
- 9・・・ 就任する。 ——— 1例  
III 278. 09 かく申せば、男君<兼家>の大臣近く○ものしたまふを申すとぞ思すらむ。さにはあらず、<夢解きから道綱母および侍女への発話>
- 9・・・ 出産する。 ——— 2例  
I 099. 10 なほもあらぬことありて、春、夏、なやみ暮らして、八月つごもりに、とかう○ものしつ。  
I 109. 08 このごろここ<某女>にわづらはるることありて、…昨日なむ、たひらかに○ものせらるめる。<兼家から道綱母への書状>
- 9・・・ 食べる。 ——— 2例  
I 165. 01 <道綱母の初瀬詣での一行が帰途にあつて>としみのまうけありければ、とかう○ものするほど、  
II 240. 12 <鳴滝に参籠して>今日は十五日、いもひなどしてあり。<道綱には>からく催して、「魚など○ものせよ」とて、今朝、京へ出だし立てて、
- 9・・・ 用意する。 ——— 2例  
II 171. 03 三月三日、筋供など○ものしたるを、人<客>なくてさうざうして、ここの人々<侍女たち>、  
III 362. 15 助<道綱>のついたちのもの<装束>ども、また白馬にものすべき<着て行く物>など、○ものしつるほどに、暮れはつる日にはなりにけり。
- 9・・・ もてなす。 ——— 1例  
II 261. 10 <初瀬参詣の途上の椿市では、もてなしをする所が多く、>ものかづけなどするに、手を尽くして○ものすめり。
- 9・・・ 人を遣る。使いを遣る。 ——— 1例  
なお、書状や歌を送ることは、持たせて使者を遣ることでもあるが、それぞれで事例を挙げ、ここには繰り返さない。



- Ⅲ284.11 これ<志賀山麓の女の娘を>迎へに○ものす。忍びて、ただ清げなる網代車に、馬に乗りたるをのこども四人、下人はあまたあり。大夫<道綱>やがてはひ乗りて、しりに、このこと<養女を>に口入れたる人と乗せてやりつ。 — 1例
- 9・・・閉じる。 — 1例
- Ⅲ295.04 <近隣に火事があったが、>ここ<道綱母邸>には大夫<道綱>ありければ、…、門強うなど○ものしたりければ、らうがはしきこともなかりけり。 — 1例
- 9・・・配る。 — 1例
- Ⅲ296.08 「かく<近隣にあった火事で道綱母邸に避難して>集まりたる人に○ものせよ」とて<兼家が>急ぎける<衣料>は、 — 1例
- 9・・・譲る。 — 1例
- Ⅲ316.08 <道綱母が>住むところはいよいよ荒れ行くを、人少なにもありしかば、人に○ものして、わが<倫寧が>住むところにあらせむといふことを、わが頼む人<倫寧>さだめて、 — 1例
- 9・・・招じ入れる。 — 1例
- Ⅲ330.09 格子二間ばかり上げて、簀子に火ともして、廂に<速度を>○ものしたり。助<道綱>、対面して、 — 1例
- 9・・・奉仕する。 — 1例
- Ⅲ333.08 助<道綱>、寮の使ひにとて、祭に○ものすべければ、<道綱母は>そのことをのみ思ふに、 — 1例
- 9・・・着る。 — 1例
- Ⅲ362.15 助<道綱>のついたちのものども<元日の参賀の装束など>、また白馬に○ものすべきなど、ものしつるほどに、暮れはつる日にはなりにけり。
- 「…などものす」…を使う。副助詞「など」がすべてに見える。 — 7例
- ・「わりご<破子>などものす」弁当を使う、弁当を食べる。 — 3例
  - I 160.02 <初瀬参詣の途次で>破子など○ものして、舟に車かき据ゑて、行きもて行けば、
  - II 205.02 <石山参詣の途次で>からうして行き過ぎて、走り井にて、破子など○ものすとて、幕引きまはして、とかくするほどに、
  - II 260.01 <初瀬参詣の途次で>ようたての森に車とどめて、破子など○ものす。みな人の口むまげなり。
  - ・「だい<台>などものす」食事をする。 — 1例
  - Ⅲ354.06 宵のほど、火ともし、台など○ものしたるほどに、せうととおぼしき人、近うはひ寄りて、
  - ・「ゆ<湯>などものす」で、湯を使う、湯を浴びる。 — 2例
  - II 206.08 夜になりて、湯など○ものして<湯などつかって身を清め>、御堂に上る。
  - II 228.11 湯など○ものして<湯などつかって身を清めてから>御堂にと思ふほどに、
  - ・「てうづ<手水>などものす」で、手水を使う、手などを洗う。 — 1例
  - II 248.03 <外にいる道隆を内へ招いたところ、道隆は>、歩み出でて、高欄におしかかりて、まづ手水など○ものして入りたり。
- 「ものすべきこと」用事。主語として述語「あり「はべり」に関する。 — 3例
- II 201.03 ○ものすべきことのあればなむ<用事>があるので、道綱母邸に今夜は来られない。いま明日明後日のほどにも <兼家から道綱母への発話>
  - II 239.04 ただいまは、<鳴滝参籠から下山することについて、兼家からの指示があつても>いかにもいかに思はず。いま○ものすべきことあらば<帰らねばならぬことがおきたら>、まかでなむ。<道綱母から兼家の使者への発話>
  - Ⅲ348.04 つとめて、寮に○ものすべきことはべるも<行かねばならぬ用がござりますが>、<速度から道綱母への発話>
- ものしおく <物置> 1例    ものしやる <物遣> 1例

うりわりご 〈瓜破子〉瓜の形をした弁当箱。「わりご」は容器を意味し、直後に「筥」と言い換えられ、そこに彫金しようとも言われる。 — 1例

IV375.10 〈兼家が〉銀の○瓜破子をして、院に奉らむとしたまふに、「この筥にうたむ」とて、  
〈詞書〉

→わりご 〈破子〉7例

たつ 〈立〉動詞，四段活用。 — 未勘  
「立ちながら」 — 3例

木村伊牟田注に、「当時、穢れがあるときでも、立ったままで会えば、その穢れに触れないとされた。」〈p. 131〉

I 131.11 〈道綱母の母親の死を弔いに訪れた兼家は〉うち泣きて、穢らひも忌むまじきさまにありければ、〈侍女が〉「いと便なかるべし」などものして〈引きとめたところ〉、○立ちながらならなむ〈見舞いを述べていった〉。

I 133.01 かくて〈道綱母が母親の葬儀などを過ぎて〉あるほどに、〈兼家は〉○立ちながらものして、日々にとふめれど、

II 174.10 人〈兼家〉はかくきよまはるほどとて、〈道綱母のところには〉例のやうにも通はず、…とて通ふたよりにぞ、○立ちながらなどものして、「いかにぞ」などもある。

てうづ 〈手水〉 — 1例

「手水などものす」手などを洗い清める。 — 1例

II 248.03 歩み出でて、高欄におしかかりて、まづ○手水〈てうづ〉などものして入りたり。

ものし 〈物〉形容詞，シク活用。不愉快である。気分が沈む。 — 10例

1 事態について不快感をもつ。 — 9例

1・1 述語となる。 — 7例

事態は副詞節で示される。ただし、a I 144.02で主語である。

I 129.02 月夜のころ、〈兼家と〉よからぬ物語して、あはれなるさまのことども語らひてもありしころ思ひ出でられて、○ものしければ、

a I 144.02 さて、〈病床の兼家を見舞った道綱母に、兼家が〉「いざ、もろともに〈道綱母邸に〉帰りなむ。また〈道綱母が兼家邸を訪れるの〉は、○ものしかるべし」などあれば、〈次例へ続く〉

I 144.04 〈道綱母が〉「かくまゐり来たるをだに、人いかにと思ふに、御迎へなりけりと見ば、いとうたて○ものしからむ」と言へば、〈前例から続く〉

II 186.10 …〈依頼された屏風歌から9首挙げて〉など、あぢきなく、あまたにさへしひなされて、これらが中に漁火と群鳥と〈2首のみ〉はとまりにけり、と聞くに、○ものし。

b II 229.08 〈鳴滝参籠について兼家に説明したと、道綱母邸の侍女がよこした書状に〉…などぞ言ひたるを見て、うたて、心幼くおどろおどろしげにもやしないつらむ〈大袈裟に説明したのではないか〉、いと○ものしくもあるかな、…、よ思ひつつ、

II 243.15 〈兼家からの書状に返書を認めて〉「御端書はいかなることにかありけむと、思うたまへ出でむに、○ものしかむべければ、さらに聞こえさせず。あなかしこ」など書きて、

II 268.01 こなたざまならでは、方も〈方塞がりもないらしい〉、など、○物しくて、√…

1・2 感情を示す動詞に引用される。 — 2例

事態は、a I 107.01で動詞の目的語であり、b I 157.06で潜在する主語である。なお、1・1

b II 229.08 「ものしくもあるかな」の「あり」は形式的であるので、こちらに並べない。

a I 107.01 人〈兼家〉につきて〈人びとが〉聞こえごつを聞くを、○ものしうのみおぼゆれば、日暮はわびしうのみおぼゆ。

b I 157.06 <登りが>まかでたまふに、さきのごと、こなた<道綱母邸>になどあるを、「夢に○ものしく見えし」など言ひて、あなた<兼家邸>にまかでたまへり。

2 感情・気分について、状態が悪い。 — 1例

II 176.09 <兼家が>たはぶれにも御気色の○ものしきをば、<道綱は>いとわびしと思ひてはんべめるを、いと大きなることなくてはべらむには、御気色など見せたまふな。<道綱母が病床で認めた遺書>

ものしおく <物置> 動詞，四段活用。話してある。 — 1例

III 285.06 <道綱母が>「身の心細さに、人の捨てたる子をなむ<養子に>取りたる」など○ものしおきたれば、<兼家が>「いで見む。誰が子ぞ。…」とあるに、

ものしげ <物> 形容動詞，形容詞「ものし」からの派生。気分について、状態が悪いようである。

— 1例

II 214.12 <道綱母が>几帳引き寄せて、気色○ものしげなるを<兼家が>見て、

ものしやる <物遣> 動詞，四段活用。人を遣って言う。 — 1例

II 231.15 京<道綱母自身の邸>へ○ものしやるべきことなどあれば、人出だし立つ。

よに <世> 副詞。 — 11例

1 とりわけ。 — 1例

a I 140.07 な泣きたまひそ。苦しきまさる。○よにいみじかるべきわざは、心はからぬほどに、かかる別れせむなむありける。<道綱母邸に来ていて苦しみ出した兼家から道綱母への発話。3 a I 140.09へ続く>

2 全く。少しも。 — 2例

名詞・形容詞の連語「心緩びなく気が安まることがない」に先行する。

I 149.04 かやうに胸つぶらはしきをりのみあるが、○世に心ゆるびなきなむ、わびしかりける。

II 222.12 年ごろをだに、○世に心ゆるびなく憂しと思ひつるを、ましてかくあさましくなりぬ、

3 まさか。よもや。 — 8例

動詞の打消推量「…じ」に先行する。

b III 313.03は「節くよ」との懸詞である。

a I 140.09 <兼家自身が死んだら>いかにしたまはむずらむ。ひとりとは○よにおはせじな。さりとも、おのが忌のうちに<再婚を>したまふな。<兼家の発話。1 a I 140.07から続く>

II 221.09 <兼家が道綱母邸に来ることは>○世にあらじと思へば、急ぎ<倫寧邸に>渡りぬ。つれなさは、そこに夜うち更けて見えたり。

II 248.10 「<道綱母が>御声など変はらせたまふなるは、いとことわりにはあれど、さらにかくおぼさじ。<道綱母と兼家との間柄は>○よにかくてやみたまふやうはあらじ」<道隆から道綱母への発話>

II 249.10 「今日、殿<兼家が>、道綱母を下山させるために参籠先の鳴滝へおはしますべきやうになむ聞く。こたみさへ下りずは、いとつべたましきさまになむ、世人も思はむ。<兼家も>またはた、○よにものしたまはじ。さらむ後にものしたらむは、いかが、人笑へならむ」<某から道綱母への書状>

II 249.13 いかにせむ、<兼家は道綱母自身を鳴滝から>こたみは○よにしづらすべくものせじ<木村伊牟田訳、有無を言わず連れもどそうとするにちがいない>と思ひ騒ぐほどに、

III 275.13 いとげにあめれど<兼家はすぐにも来そうに書状をよこしたが>、○よにもあらじ、いまは<道綱母自身は兼家にとって>人知れぬさまになりゆくものをと思ひ過ぐして、

b III 313.03 √<大和だつ女自身は>下刈らむほどをも知らず真菰草○よにおひそはじ<連れ添うことができない>人は刈るとも<兼家が思いをかけても> <大和だつ女から道綱へ>

III 328.11 <速度が道綱母の養女との婚儀を急ぐのは>いとあやう、いちはやき曆にもあるかな、

なでふことなり、兼家の許しが得られた旨の書状を兼家の侍女がよこしたと速度は言うが、兼家が許すことは〇よにあらじ、この文兼家の許しを得た旨の速度あての書状を<書く人兼家の侍女>のそらごとならむと思ふ。

よも 副詞。まさか。よもや。動詞の打消推量「…じ」に先行する。 — 1例

Ⅲ308.02 いまや、今日やと待たるる命、やうやう月たちて日もゆけば、さればよ、〇よも死なじものを、さいはひある人こそ命はつづむれ、

よろこび〈喜〉 — 7例

1 慶事。昇進する喜び。 — 2例

I 154.03 かかる世に、中將にや三位にやなど、〇よろこびをしきりたる人〈兼家〉は、

Ⅲ272.05 「なか、『兼家は昇進していかにかく嬉しいことか』と言ふまじき理由が道綱母にあるか。〇よろこびのかひなくなむ」など兼家からあり。

2 祝いを述べること。 — 3例

I 152.08 東宮亮といひつる人〈兼家〉は、藏人頭などいひてののしれば、村上天皇崩御の悲しびはおほかたのことに、〇御よろこびといふことのみ聞こゆ。あひこたへなどして、すこし人ごごちすれど、

II 190.13 <賭弓で道綱が活躍して>その夜も、のちの二三日まで、知りと知りたる人、法師にいたるまで、若君<道綱>の〇御よろこび聞こえに聞こえにと、おこせ言ふを聞くにも、あやしきまでうれし。

Ⅲ272.02 司召、二十五日に、兼家は>大納言になどののしれど、わがためは、ましてところせきにこそあらめと思へば、〇御よろこびなど、言ひおこする人も、かへりては弄するこちして、ゆめうれしからず。

3 謝礼の挨拶。叙爵のお礼回り。 — 2例

a II 214.02で「よろこびにありきなどすれば」の主語は兼家であり、木村伊牟田訳「子供を連れて叙爵のお礼まわりなどするので」とする。

a II 214.02 <道綱母邸にきた兼家は>「道綱が叙爵して謝礼の挨拶で供にありかすべきをのこどもなど、まみらざるを、かしこ兼家邸にものしてとのへむ。装束して来よ」とて出でられぬ。〇よろこびにありきなどすれば、いとあはれにうれしきこちす。

Ⅲ322.10 司召のこちあり、兼家からのめづらしき文にて、「右馬助になむ道綱が任官した」と告げたり。道綱が>こかしこに〇よろこびものするに、その寮の頭<遠度>、叔父にさへものしたまへば、まうでたりける。

わりご〈破子〉弁当。 — 7例

1 食べるものとして。 — 3例

副助詞「など」を伴い、食べることは動詞「ものす」による。

I 160.02 〇破子などものして、舟に車かき据ゑて、行きもて行けば、

II 205.02 からうして行き過ぎて、走り井にて、〇破子などものすとて、幕引きまはして、とかくするほどに、

II 259.15 ようたての森に車とどめて、〇破子などものす。みな人の口むまげなり。

2 持ち運ぶものとして。 — 4例

a II 195.05は配るものでもあり、b II 237.14・c II 244.11は多量にあるものでもある。

II 195.02 「ここに〇御破子待ちつけむ。かの崎はまだいと遠かめり」

a II 195.05 〇破子もて来ぬれば、さまさまあかちなどして、

b II 237.14 馬どもなど、ふさに引き散らして騒ぐ。〇破子やなにやと、ふさにあり。

c II 244.11 なま親族だつ人、とぶらひにものしたり。〇破子などあまたあり。

→うりわりご〈瓜破子〉1例

# 『蜻蛉日記』における「聞こゆ」「申す」の意味・用法 —『とはずがたり』との比較—

いりえ  
入江 さやか

同志社大学文学部嘱託講師

## キーワード

聞こゆ, 申す, 意味・用法, 偏り

### 要旨

本稿では、平安時代成立の『蜻蛉日記』における本動詞「聞こゆ」「申す」の意味・用法について、分類、記述をし、その意味・用法ごとの事例数を挙げることを目的とする。『蜻蛉日記』において、「聞こゆ」は110例見られ、最も多い意味・用法は、「言ふ」の謙讓語、「申し上げる」の76例である。「申す」は、11例のみの使用で、「聞こゆ」と比較すると、10対1の比で少ない。

鎌倉時代成立の『とはずがたり』においては、「聞こゆ」は55例、「申す」は354例見られる。発言行為である「申し上げる」という意味・用法は、「申す」において、240例見られるのに対して、「聞こゆ」においては、「申し上げる」の意味・用法はほとんど見られない。

### 1. はじめに

本稿では、平安時代成立の『蜻蛉日記』における本動詞「聞こゆ」「申す」について、意味・用法を分類、記述し、その意味・用法ごとに事例数を挙げる。これによって、多義語における、意味・用法の出現の偏りを知ることができる。さらに、入江(2014)『『とはずがたり』における「申す」の意味・用法』、入江(2015)『『とはずがたり』における「聞こゆ」の意味・用法』と比較し、意味・用法の出現の偏りの変化についても、数値で示す。

### 2. 研究方法

『蜻蛉日記』に用いられている「聞こゆ」「申す」の事例をすべて抜き出し、意味・用法の記述、分類を行う。本文は、木村正中・伊牟田経久校注・訳(1995)『新編日本古典文学全集 13 土佐日記 蜻蛉日記』による。事例を記す際は、木村・伊牟田(1995)の本文で「聞こゆ」「申す」が用いられている箇所を抜き出し、(巻, 頁数, 行)の順で記す。Iは上巻, IIは中巻, IIIは下巻, IVは巻末歌集を示す。(I 130.03)は上巻, 130頁, 3行目ということである。本稿では、『蜻蛉日記』における本動詞「聞こゆ」110例、「申す」11例を中心に述べる。「聞こえさす」は、「聞こゆ」に助動詞「さす」が下接したものとする。「聞こゆ」「申す」を前項,あるいは後項に持つ複合動詞については、事例数のみ挙げる。「聞こゆ」「申す」の連用形が名詞化した「聞こえ」「申し」は、『蜻蛉日記』において、「聞こえ」の事例は見られず、「御前申し」が1例、『とはずがたり』において、「聞こえ」が5例、「申し」の事例

は見られなかった。

### 3. 『蜻蛉日記』における「聞こゆ」「申す」の意味・用法—『とはずがたり』との比較

#### 3.1 『蜻蛉日記』における「聞こゆ」の意味・用法

『蜻蛉日記』における「聞こゆ」の意味・用法を、次の5つに分類する。事例数も示す。

- |                           |      |     |
|---------------------------|------|-----|
| ① 音や声が自然に耳に入る。聞こえる。       | ———— | 8例  |
| ② 思われる。聞いて、わけがわかる。        | ———— | 10例 |
| ③ 間接的に他人から聞く。伝聞する。うわさで聞く。 | ———— | 3例  |
| ④ 発言行為「言う」の謙譲語            | ———— | 76例 |
| …④申し上げる。返事をする。手紙を書く。      |      | 68例 |
| …④歌を詠む。                   |      | 7例  |
| …④人や立場・呼び名について、～と申し上げる。   |      | 1例  |
| ⑤ その他行為「する」「願う」「会う」の謙譲語   | ———— | 13例 |
| …i 「する」の謙譲語               |      | 7例  |
| …ii 「願う」の謙譲語              |      | 3例  |
| …iii 「会う」の謙譲語             |      | 3例  |

##### 3.1.1 ①音や声が自然に耳に入る。聞こえる。

「聞こゆ」の原義である「音や声が自然に耳に入る。聞こえる」の意味・用法が、全事例110例のうち、8例で全体の7.3%である。(1)は兼家の詠んだ和歌の例で、それ以外は地の文で用いられている。以下は、その事例である。

- (1) 兼家 鹿の音も 聞こえぬ里に住みながらあやしくあはぬ目をも見るかな (I 093.03)
- (2) ひぐらしの初声 聞こえたり。(I 128.11)
- (3) 夜よきほどにて、みな帰る音も 聞こゆ。(II 217.09)
- (4) いみじき雨のさかりなれば、音もえ 聞こえぬなりけり。(II 267.02)
- (5) いまぞ「御車とくさし入れよ」などののしるも 聞こゆる。(II 267.03)
- (6) 「あな寒」と言ふ声、ここかしこに 聞こゆ。(III 275.05)
- (7) 「あなかまや」など言ふ声 聞こゆる。(III 321.09)
- (8) 言ひののしる声なれど、空をうちかけりて二声三声 聞こえたるは、身にしみてをかしょうおぼえたれば、(III 344.10)

『蜻蛉日記』の作者である藤原道綱母は、『とはずがたり』の作者である後深草院二条のように、全国を旅することもなく、家にとどまっているため、「自然に耳に入る」音が限られている。(3)から(8)までは、すべて、人の声や、人の立てる音で、それ以外に聞こえるのは、(2)のひぐらしの初声ぐらいである。

### 3.1.2 ②思われる。聞いて、わけがわかる。

この意味・用法は全 110 例中、10 例で、全体の 9.1%である。何かを聞いて、そう思われる、それとわかる、聞いてわけがわかる、理解したという意味・用法である。(18)は現代語にすると、「聞き取る」であるが、ここに分類した。(9)は会話文、(11)は和歌で、それ以外は地の文に用いられている。以下は、その事例である。

- (9) 「宵惑ひしたまふやうに聞こゆるを、ろなうむつかられたまふは。はや」とのたまへば、「乳母なくとも」とて、しぶしぶなるに、(I 157. 01)
- (10) 「ささなみや志賀の唐崎」など、例のかみごゑふり出だしたるも、いとをかしう聞こえたり。(II 196. 04)
- (11) 道綱母 なきかへる声ぞきほひて聞こゆなる待ちやしつらむ関のひぐらし  
(II 196. 10)
- (12) 「いづくのぞや」と問ひたれば、「石山へ、人の御迎へに」とぞ答ふなる。この声もいとあはれに聞こゆるは、言ひおきしを、おそく出でくれば、(II 210. 05)
- (13) さて、あかつきがたに、松吹く風の音、いと荒く聞こゆ。(III 273. 06)
- (14) かかる音のせぬは、ものたすけにこそありけれとまでぞ聞こゆる。(III 273. 08)
- (15) 下簾ひきつくるひて、中門より引き出でて、さきよいほどに追はせてあるも、ねたげにぞ聞こゆる。(III 274. 10)
- (16) 鶏の声など、さまざまなごう聞こえたり。(III 289. 06)
- (17) 八日、雨降る。夜は石の上の苔苦しげに聞こえたり。(III 290. 12)
- (18) をりをりにそのこととも聞こえぬほどにし**のびて**うち誦ずることぞある。(III 348. 03)

### 3.1.3 ③間接的に他人から聞く。伝聞する。うわきで聞く。

この意味・用法は、世間で人々が言っていることを伝聞した、あるいは、間接的に他人から聞いたこととして、ある事柄を取り上げることを示す。全 110 例のうち、3 例で、全体の 2.7%である。(21)は手紙文で、その他は地の文である。

- (19) 悲しびはおほかたのことにて、御よろこびといふことのみ聞こゆ。(I 152. 09)
- (20) それより、例の障りしげく聞こえつつ、日経ぬ。(III 297. 08)
- (21) 「いで、あなあさまし。心にもあらぬことを聞こえさせ、八月にもすまじ。(III 351. 08)

### 3.1.4 ④「言う」の謙譲語

ここでは、「聞こえる」「思われる」「聞く」という意味ではなく、「言ふ」の謙譲語である「申し上げる」という発言行為について述べる。「聞こゆ」において、この意味・用法が最も多く、76 例見られ、全 110 例のうち、69.1%、約 7 割を占める。下位項目として、④申

し上げる。返事をする。手紙を書く、㊸歌を詠む、㊹人や立場・呼び名について、～と申し上げる、に分ける。

#### 3.1.4.1 ㊺「申し上げる。返事をする。手紙を書く」

まず、㊺「申し上げる。返事をする。手紙を書く」の意味・用法である例を挙げる。全110例のうち、68例見られ、全体の61.8%を占める。会話文での使用が27例、手紙文34例、和歌が1例、地の文6例である。以下、㊺の事例である。会話文、手紙文、和歌、地の文の順に挙げる。

〈会話文〉

- (22) 例の人、「かしこし。をさをさしきやうにも 聞こえ むこそよからめ」とて、さるべき人して、あるべきに書かせてやりつ。(I 091.15)
- (23) (24) 「われ、はかなくて死ぬるなめり。かしこに 聞こえ むやうは、『おのがうへをば、いかにもいかにもな知りたまひそ。この御後のことを、人々のものせられむ上にも、とぶらひものしたまへ』と 聞こえ よ」とて、「いかにせむ」とばかり言ひて(I 130.07) (I 130.09)
- (25) はらからとおぼしき人、まだ臥しながら、「もの 聞こゆ。天地を袋に縫ひて」と誦ずるに、(II 169.12)
- (26) 「おはしまして、問はせたまひつれば、ありのままになむ 聞こえ させつる。(II 198.04)
- (27) 「おもとたちもみな勘当にあたりたまふなり。よく 聞こえ て、はや出だしたてまつりたまへ」など、言ひ散らして帰る。(II 239.12)
- (28) 入りて、「さなむ」とものするに、「思しよらむところに 聞こえ よかし」など言へば、(III 330.13)
- (29) (30) その暮に、またものして、「一夜のいとかしこきまで 聞こえ させはべりしを思ひたまふれば、さらにいとかしこし。『いまはただ、殿より仰せあらむほどを、さぶらはむ』など、聞こえ させになむ、今宵は生ひなほりして、まゐりはべりつる。『な死にそ』と仰せはべりしは、千歳の命たふまじきこちなむしはべる。(III 338.11) (III 338.14)

〈手紙文〉

- (31) (32) 返りごとは、かしこなるおとなしき人して書かせてあり。『みづから 聞こえ めがわりなきこと』とのみなむ 聞こえ たまふ」などぞある。(I 141.12) (I 141.13)
- (33) 書きけることは、「命長かるべしとのみのたまへど、見はてたてまつりてむとのみ思ひつつありつるを、かぎりにもやなりぬらむ、あやしく心細きこちのすればなむ。つねに 聞こゆる やうに、世に久しきことのいと思はずなれば、(II 176.06)
- (34) (35) 「すなはち 聞こえ さすべく思うたまへしを、いかなるにかあらむ、まうでがたくのみ思ひてはべめるたよりになむ。まかでむことは、いつとも思うたまへわかれば、聞こえ させむかたなく」など書いて、(II 241.11) (II 241.13)
- (36) さらにさらに 聞こえ させじ。いまは高き峰になむのぼりはべるべき」など、ふさ



に 書きたり。(Ⅲ338.04)

(37) まだしきに、助のもとに、「みだり風おこりてなむ、聞こえしやうにはえまみらぬ。  
ここに午時ばかりにおはしませ」とあり。(Ⅲ348.10)

〈和歌〉

(38) 道綱 濡れつつも恋しき道は避かなくにまだ 聞こえずと思はざらなむ(Ⅳ374.04)

〈地の文〉

(39) 「ほど経にければ便なし」とて、ただ「このごろは仰せ言もなきこと」と 聞こえられたれば、かくのたまへる、(Ⅰ125.02)

(40) ただ例の御文にて、端に、「この十重なりたるは、かうてもはべりぬべかりけり」とのみ 聞こえたる御返り、

愆子 数知らず思ふ心にくらぶれば十重ぬるものとは見る(Ⅰ151.12)

(41) やうやう日ごろになりて、貞観殿の御方に、いかになど 聞こえけるついでに、  
道綱母 世の中をはかなきものとみささぎのうもる山になげくらむやぞ(Ⅰ152.14)

(42) (43) 知りと知りたる人、法師にいたるまで、若君の御よろこび 聞こえに 聞こえにと、おこせ言ふを聞くにも、あやしきまでうれし。(Ⅱ190.14) (Ⅱ190.14)

(44) 殿、離れたまひてのち、「かよふ人あべし」など 聞こえたまひければ、(Ⅳ376.11)

### 3.1.4.2 ㊤「歌を詠む」

「歌を詠む」の意味・用法は7例見られ、全110例の6.4%である。地の文に6例、手紙文に1例見られる。(49)は、本歌を引いたものであるため、「歌を詠む」に分類しているが、実際は、本歌を引くことによって、来てくれない兼家への恨みを間接的に表現している。

〈地の文〉

(45) 忌あれば、とめつ」とのたまへる御返り、

兼家 世をふとも契りおきてし仲よりはいとどゆゆしきことも見ゆらむ  
と 聞こえらる。(Ⅰ123.01)

(46) ある色紙の端を脛におしつけて、それ書きつけて、あの御方に奉る。

道綱母 かたこひや苦しがるむ山賤のあふごなしとは見えぬものから  
と 聞こえたれば、海松の引干の短くおしきりたるを結び集めて、(Ⅰ155.08)

(47) 御文奉るついでに、

道綱母 ささがにのいまはとかぎるすぢにてもかくてはしばし絶えじとぞ思ふ  
と 聞こえたり。返りごと、なにくれといとあはれに多くのたまひて、(Ⅱ200.03)

(48) 雨いたう降りければ、えおはせぬほどに、隨身して、「しづくをおほみ」と 聞こえたまへりける返りごとに、

道綱 濡れつつも恋しき道は避かなくにまだ聞こえずと思はざらなむ(Ⅳ374.03)

〈手紙文〉

(49) 月ごろ見えねば、なかなかいと心やすくなむなりにたる。『風だに寒く』と 聞こえ

さすれば、ゆゆしや」と書きけり。(Ⅲ301.12)

### 3.1.4.3 ④人や立場・呼び名について、～と申し上げる

ここでは、「人や立場・呼び名について、～と申し上げる」の用法について、事例を挙げておく。『蜻蛉日記』において、会話文に1例のみ見られる。

(50) 「殿の通はせたまひし源宰相兼忠とか 聞こえし人の御女の腹にこそ、女君いとうつくしげにて、ものしたまふなれ。(Ⅲ279.11)

### 3.1.5 ⑤その他行為「する」「願う」「会う」

最後に、発言行為以外の行為「する」「願う」「会う」という意味・用法についてみる。「する」の謙譲語が7例、「願う」の謙譲語が3例、「会う」の謙譲語が3例、合計13例、全110例のうちの11.8%である。

i 「する」の謙譲語とした事例は、「聞こゆ」の前に、「返り」「返りごと」「消息」「うめき」が来るものである。「返りごと」2例、「消息」1例、「御消息」2例、「御返り」1例、「うめき」1例の計7例見られる。ここでは、「聞こゆ」は「する」の謙譲語としたが、「申し上げる」という発言行為でないわけではない。しかしながら、「返り」「消息」「うめき」に発言行為が含まれているとみなし、「聞こゆ」は「する」の意味・用法とした。(56)は、速度が養女へ度重なる求婚をするので、それに困り果てた道綱母が、兼家に相談したら、その返事に、「時期については話してあるのに、どうしてこうあせるのだろう。8月になるのを待っている間に、そちらでははなやかにもてなしておいでとか、世間で取沙汰しているようだ。そのほうがかえって、恨みのため息でもつきたい気持ちだよ」と、書いてあったという場面である。

(51) はたあやしともや思はずありけむ、返りごとなど 聞こえてけり、と伝へ聞きて、(Ⅱ182.12)

(52) 幼き人の「ひたやごもりならむ。消息聞こえに」とて、ものするにつけたり。(Ⅱ227.03)

(53) 日暮れて、「賀茂の泉におはしつれば、御返りも 聞こえで帰りぬ」と言ふ。(Ⅲ301.14.)

(54) 返りごと 聞こゆべきを、まづ、これはいかなることぞと、ものしてこそは、とてあるに、(Ⅲ325.14)

(55) 帰りにて、「『などか、御消息聞こえさせたまふ間にて、御返りのなかるべき』といみじう恨みきこえたまひつる」など語るに、(Ⅲ326.14)

(56) びびしうもてなしたまふとか、世に言ふめる。それはしも、うめきも 聞こえてむかし」などあり。(Ⅲ340.12)

ii 「願う」の謙譲語とした「聞こゆ」は以下の3例である。(57)は、(50)に後続する事例

で、道綱母が養女を迎えたいと周囲に話したところ、適当な娘がいるので、そのようにお願いしたらどうかと言う人がいた、という場面である。「養女を迎えたいと申し上げた」と、発言行為として分類することも可能である。(58)(59)は、巻末歌集の例である。どちらも地の文に用いられ、「歌を御所望になった」という意味である。

(57) 女君いとうつくしげにて、ものしたまふなれ。おなじうは、それをやはさやうにも  
聞こえさせたまはぬ。(Ⅲ279.13)

(58) 尚侍の殿、「天の羽衣といふ題をよみて」と聞こえさせたまへりければ、  
道綱母 ぬれ衣にあまの羽衣むすびけりかつは藻塩の火をし消たねば(Ⅳ366.10)

(59) 「この筈にうたむ」とて、摂政殿より、歌聞こえさせたまへりければ、  
道綱母 千代も経よたちかへりつつ山城のこまにくらべしうりのすゑなり(Ⅳ375.12)

iii 「会う」の謙讓語とした「聞こゆ」は以下の3例である。この意味・用法でも、「申し上げる」という発言行為を含んでいる。(60)(61)は道綱母の鳴滝籠りの場面である。(60)は兼家の使いが道綱母に、「毎日はお訪ねできない」と述べ、(61)は、道綱が「今までご無沙汰しておりましたおわびを兼ねて」参上したと大夫に取り次がせる場面である。(62)は、道綱母が兼家へ返した文で、「お見舞いしなければと」誰よりも先に気づいていたという内容である。「人とふ」に対応しているため、「会う」に分類した。

(60) 夕影になりぬれば、「急ぐとあれば。え日々には聞こえず。おぼつかなくはあり。  
(Ⅱ239.01)

(61) 兵衛佐なめりと思へば、大夫呼びいだして、「いままで聞こえさせざりつるかしまり、とり重ねてとてなむ、まゐり来たる」と言ひ入れて、(Ⅱ247.11)

(62) 「心細げなる山住みは、人とふものこそ聞きしか。さらぬはつらきものと言ふ人もあり」とある返りごとに、「聞こゆべきものとは、人よりさきに思ひよりながら、ものと知らせむとてなむ。(Ⅱ264.01)

### 3.2 『蜻蛉日記』における「申す」の意味・用法

「申す」は11例のみ見られる。発言行為とその他行為の二つに大きく分けられる。

発言行為④「言ふ」の謙讓語、「申し上げる」	—————	4例
その他行為 i 「願う」「祈る」の謙讓語、「お願いする」「お祈りする」	—————	7例

まず、発言行為である④「申し上げる」の意味・用法である4例について述べる。(63)(64)(65)(66)はいずれも会話文で使用されている。(63)(64)は夢解きをする人物、(65)は道綱、(66)は兼家の発話である。(63)(64)の聞き手は道綱母であり、夢解きをする人物の身分は低い。(65)は、右馬頭藤原遠度が道綱母の養女へ求婚している場面で、道綱が事の成り行きを道綱母へ説明する箇所である。「右馬頭さまも『殿(兼家)は何か仰せられまし

たか』とお尋ねになりましたので、『仰せがございました』と」遠度に申したと、道綱母に報告している。(66)は、兼家が道綱母に対して、下山の挨拶を「仏」へ「申しあげなさい」と言う意味である。

(63) (64)「これは大臣公卿出でたまふべき夢なり。かく 申せば、男君の大臣近くものしたまふを 申す とぞ思すらむ。さにはあらず、きんだち御行先のことなり」とぞ言ふ。(Ⅲ278.09)

(65) また、かの頭も、『殿は仰せられつることやありつる』となむのたまひつれば、『さりつ』となむ 申しつれば、『明後日ばかりよき日なるを、御文奉らむ』となむのたまひつる」と語る。(Ⅲ325.01)

(66) 「このこと、かくすれば、出でたまひぬべきにこそはあめれ。仏にことのよし 申したまへ。例の作法なる」とて、天下の猿楽言を言ひののしらるめれど、(Ⅱ251.07)

次に、その他の行為である i 「願う」「祈る」の謙讓語、「お願いする」「お祈りする」7例について述べる。これは、「神仏や朝廷など支配者に、お願い申し上げる・お祈りする」という意味・用法である。その他の行為としたが、発言行為でないわけではない。この意味・用法は、単なる発言行為ではなく、請願、祈願、陳情のような特定の意図を持つことが、④「申し上げる」とは異なる。(70)は冷泉院にお願いする、それ以外の(67)(68)(69)(71)(72)(73)は、すべて神仏にお祈りするという意味である。(70)は、兼家が道綱を元服させ、院(冷泉院)に叙爵をお願いすると取り決める場面である。(73)は手紙文に使用された事例で、石山寺で出会った法師に、「大夫を一人前にしてくださいようにとだけ、お祈りください」としたためる場面である。(67)(68)(69)(71)(72)はすべて地の文で、道綱母が仏に「お願い申し上げる・お祈りする」という意味で用いられる。

(67) 九月になりて、世の中をかしからむ、ものへ詣でせばや、かうものはかなき身の上も 申さむ、などさだめて、いと忍び、あるところにもものしたり。(Ⅰ149.08)

(68) 夜になりて、湯などもものして、御堂に上る。身のあるやうを仏に 申すにも、涙に咽ぶばかりにて、言ひもやられず。(Ⅱ206.09)

(69) さては夜になりぬ。御堂にてよろづ 申し、泣き明かして、あかつきがたにまどろみたるに、見ゆるやう、(Ⅱ208.13)

(70) それより後ぞ、すこししばしば見えたる。「この大嘗会に院の御給ばり 申さむ。幼き人にかうぶりせさせてむ。十九日」とさだめてす。(Ⅱ212.08)

(71) いまはまた降りくべからむものを、道にて雨もや降らむ、神もや鳴りまさらむと思ふに、いとゆゆしう悲しくて、仏に 申しつればにやあらむ、晴れて、ほどもなく帰ったり。(Ⅱ241.01)

(72) 御堂にものするほどに、ここちわりなし。おぼろげに思ふこと多かれど、かくわりなきにものおぼえずなりにたるべし、なにごとも 申さで、明けぬと言へど、雨なほおなじやうなり、(Ⅱ261.02)

(73) 「いまは、かぎりに思ひはてにたる身をば、仏もいかがしたまはむ。ただ、いまは、この大夫を人々しくてあらせたまへなどばかりを申したまへ」と書くにぞ、(Ⅲ301.02)

### 3.3 『とはずがたり』との比較

これまで、分類してきた事例数を表にまとめる。会話文、手紙文、心内発話は「会話文」として一つにまとめ、地の文、和歌と分けて示すが、これといった特筆すべき特徴は見られなかった。『とはずがたり』においては、「聞こゆ」「申す」ともに、会話文での使用例が少ないが、地の文と会話文の比率を算出していないので、単純な比較はできない。

〈表1〉本動詞「聞こゆ」の意味・用法

	『蜻蛉日記』				『とはずがたり』			
	地の文	会話文	和歌	計	地の文	会話文	和歌	計
①聞こえる	7		1	<b>8</b>	21			<b>21</b>
②思われる	8	1	1	<b>10</b>	6	2		<b>8</b>
③伝聞する	2	1		<b>3</b>	18	2		<b>20<sup>D</sup></b>
④言う④申上げる	6	61	1	<b>68</b>	3			<b>3</b>
㊦歌を詠む	6	1		<b>7</b>				<b>0</b>
㊧～と呼ぶ		1		<b>1</b>	2			<b>2</b>
⑤ i する		7		<b>7</b>				<b>0</b>
ii 願う	2	1		<b>3</b>	1			<b>1</b>
iii 会う		3		<b>3</b>				<b>0</b>
合計	31	76	3	<b>110</b>	51	4		<b>55</b>

〈表2〉本動詞「申す」の意味・用法

	『蜻蛉日記』				『とはずがたり』			
	地の文	会話文	和歌	計	地の文	会話文	和歌	計
①具体的用法								
④ 申上げる		4		<b>4</b>	187	53		<b>240</b>
i 願う	4	3		<b>7</b>	17	2		<b>19</b>
ii する					19	5		<b>24</b>
iii 勸酒					4	1		<b>5</b>
②形式的用法					44	17		<b>61</b>
③連語					2	3		<b>5</b>
	4	7		<b>11</b>	273	81		<b>354</b>

『蜻蛉日記』、『とはずがたり』の延べ語数は、それぞれ、22,400語、31,335語である<sup>②</sup>。「聞こゆ」は『蜻蛉日記』で110例、『とはずがたり』で55例見られる。『蜻蛉日記』は、延べ語数が『とはずがたり』よりも少ないのにも関わらず、「聞こゆ」の事例数が、『とはずがたり』に比べて、2対1の比で多いことがわかる。『蜻蛉日記』において、「聞こゆ」の最も多い意味・用法は、④「言ふ」の謙讓語④「申し上げる」で、68例、そのうち61例が会話文での使用である。一方、『とはずがたり』においては、最も多い意味・用法は、①「聞こえる」で、21例見られる。すべて地の文において用いられている。

穂田(1965)で「敬語『聞ゆ』『聞えさす』は、中世に及んでその地位を『申す』に譲ったと言われる。」と述べている。鎌倉時代成立の『とはずがたり』において、「聞こゆ」は、敬語としてはほとんど用いられず、「聞こえる」「伝聞する」の意味・用法が主である。

『蜻蛉日記』において、「申す」は11例のみの使用で、そのうち、発言行為である「申し上げる」の意味・用法は4例、夢解きをする人物、道綱、兼家の発話において、使用されている。和田(1956)で指摘されている『源氏物語』における「申す」の「語感」についての指摘と同じ結果になるかと思われる。

源氏物語の「申す」は、身分の遥かに低い者を話手、為手として用いられることが多く、一般に公的で格式ばつてゐて、もし、身分の高い者を話手、為手として用いると、空虚な、よそよそしさを感じさせた。而して、時には、為手、受手の関係を無視した開手優遇も表はし得た。

発言行為以外の行為については、『蜻蛉日記』において、「聞こゆ」は13例見られるが、いずれも、発言行為を含んだ上で、「する」「願う」「会う」という行為につながる意味・用法である<sup>③</sup>。発言行為以外の行為を表わす「申す」は7例見られ、そのうち6例が「仏」へ、1例が「冷泉院」へお願いするという意味・用法である。お願いする対象がかなり限定されている。穂田(1962)で、「対『神仏』関係に『申す』専用度が高い」と述べられているが、『蜻蛉日記』においても同様である。『とはずがたり』においては、「申す」のその他行為の意味・用法は広い<sup>④</sup>。『蜻蛉日記』における「申す」の用例が少ないので、考察は省く。

### 3.4 複合動詞

複合動詞について、事例数についてのみ簡潔に述べる。『蜻蛉日記』『とはずがたり』において、「聞こゆ」「申す」を前項、あるいは後項に持つ複合動詞の事例数を〈表3〉に挙げる。複合動詞の認定は、『蜻蛉日記』は、宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉(2014)、『とはずがたり』は、辻村敏樹編(1992)による<sup>⑤</sup>。

「聞こゆ」の複合動詞は、異なり語数8、延べ語数10であり、『とはずがたり』より多く見られる。『とはずがたり』においては、「聞こえさす」を「聞こゆ」に分類すると、「聞こえなす」の1語しかない。

「申す」の複合動詞は、『蜻蛉日記』において、異なり語数6、延べ語数7である。『とはずがたり』においては、異なり語数21、延べ語数38である。

〈表3〉複合動詞一覧

	聞こゆ	申す
『蜻』	聞こえ合はす1, 聞こえ置く2, 聞こえごつ2, うち聞こえごつ1, 聞こえ立つ1, 聞こえ定む1, 聞こえのたまふ1, 取り聞こゆ1	申し付く1, 申し継ぐ1, 申し尽くす1, 伝へ申す1, 執り申す2, 罵り申す1,
『問』	聞こえさす1, 聞こえなす1	申し置く8, 申し入る5, 申し遣る3 申し合はす2, 申し出づ2, 申し承る2, 申し伝ふ2, 申し合ふ1, 申し表す1, 申し出だす1, 申し受く1, 申し叶ふ1, 申し通はす1, 申し通ふ1, 申しことづく1, 申し定む1, 申し知らす1, 申し尽くす1, 申し続く1, 申しなす1, 申し紛らかす1

#### 4. おわりに

本稿では、『蜻蛉日記』における「聞こゆ」「申す」の意味・用法を記述、分類し、その事例数を示した。また、『とはずがたり』における「聞こゆ」「申す」の意味・用法の事例数と比較した。

『蜻蛉日記』における「聞こゆ」の最も多い意味・用法は、④「言ふ」の謙譲語④「申し上げる」の68例で、全体の61.8%を占める。この「申し上げる」の意味・用法は、『とはずがたり』においては、ほとんど見られなくなり、「聞こゆ」ではなく、「申す」が用いられている。

『蜻蛉日記』における「聞こゆ」には、発言行為以外の行為「する」を示し得る、「消息聞こゆ」のような意味・用法が見られながら、『とはずがたり』においては、「聞こゆ」には、発言行為以外の行為は、ほとんど使用されていない。

『蜻蛉日記』において、「申す」が発言以外の行為を表わす場合、特に、「仏」に対して、「願う」「祈る」の意味・用法が主であったのが、『とはずがたり』においては、「願う」以外にも、「する」「勸酒」を表わすなど、その意味・用法は広がりを見せる。

最後に、「聞こゆ」の意味・用法中、『蜻蛉日記』『とはずがたり』において、ともに見られる「思われる」「伝聞する」の意味・用法についても、「思ふ」「言ふ」「聞く」などの語との関連から、詳しく見る必要がある。今後の課題である。

- ① 入江(2015)では、「聞こゆ」が「世に聞こゆ」として現れた場合は、⑤連語としたが、意味・用法としては、③「間接的に他人から聞く。伝聞する。うわさで聞く」に分類できるので、本稿では、③に分類した。
- ② 『蜻蛉日記』の延べ語数は、宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉(2014)による『とはずがたり』の延べ語数は、辻村(1992)を基に編集した高梨(2002)『とはずがたり語彙表』『使用度数順語彙表』から算出。
- ③ 分類に際して、穂田(1964)を参考とした。
- ④ 入江(2014)参照。
- ⑤ 複合動詞の認定で異なる語について挙げる。『とはずがたり』において、「申し承る」「申し知らせ」は1語とする。

### 【参考文献】

- 穂田定樹(1962)『「申す」と『聞ゆ』—源氏物語・枕草子を資料として—『国語国文』31(11)
- 穂田定樹(1964)『「申す」と『聞ゆ』補遺—形態の側から—』『語学文学会紀要』(2)北海道学芸大学語学文学会
- 穂田定樹(1965)「続『申す』と『聞ゆ』—源氏物語以後—」『国語国文』34(9)
- 入江さやか(2013)『「とはずがたり」における「言ふ」の意味・用法』『同志社国文学』第78号
- 入江さやか(2014)『「とはずがたり」における「申す」の意味・用法』『同志社国文学』第81号
- 入江さやか(2015)『「とはずがたり」における「聞こゆ」の意味・用法—「言ふ」「聞こゆ」「申す」「奏す」—』『同志社日本語研究』第18号
- 木村正中・伊牟田経久校注・訳(1995)『新編日本古典文学全集13 土佐日記 蜻蛉日記』小学館
- 久保田淳校注・訳(1999)『新編日本古典文学全集47 建礼門院右京大夫集 とはずがたり』小学館
- 高梨信博(2002)『とはずがたり語彙表』早稲田大学文学部高梨信博研究室
- 辻村敏樹編(1992)『とはずがたり総索引』【自立語篇】笠間索引叢刊99 笠間書院
- 宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉(2014)『日本古典対照分類語彙表』笠間書院
- 和田利政(1956)「源氏物語の『申す』」『國學院雑誌』57(7)

〔付記〕本稿は、科学研究費補助金による2010～12年度基盤研究(C)「とはずがたり全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究」(研究代表者 石井久雄, 研究課題番号 JSPS 22520478), 及び, 2013～2015年度基盤研究(C)「蜻蛉日記全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究」(研究代表者石井久雄, 研究課題番号 JSPS 25370531)の成果の一部である。



# 『とはずがたり』における名詞「すゑ(末)」の意味・用法 ——『蜻蛉日記』との比較から——

もり あかね  
森 あかね

同志社大学大学院博士後期課程

## キーワード

末, すゑ, 意味・用法, とはずがたり, 蜻蛉日記

## 要旨

『とはずがたり』における「すゑ(末)」34例と「末」を含む複合語について、意味・用法ごとに分類、記述を行い、意味・用法ごとの用例数を示すことを目的とする。その際、『蜻蛉日記』における「すゑ(末)」6例と「すゑ(末)」を含む複合語も同様の作業を行い、比較する。『とはずがたり』は『蜻蛉日記』よりも多義的に「すゑ(末)」は使用され、「すゑ(末)」の対象が拡大され、意味が分化していく過程を推測できる。

### 1 はじめに

本稿は、鎌倉時代成立の『とはずがたり』(後深草院二条作)における名詞「すゑ(末)」の意味・用法を記述し、意味・用法別の用例数を示すことを目的とする。その際に、同じ女流日記文学作品である平安時代成立の『蜻蛉日記』(藤原道綱母作)も同様の調査を行い、相違点を参考にしながら、考察を進めたい。

### 2 研究方法

『とはずがたり』『蜻蛉日記』に用いられている「末」「すゑ」の用例を全て抜きだし、意味を記述し分類する。なお、本稿で用いるテキストは久保田淳校注・訳『新編日本古典文学全集47 建礼門院右京大夫 とはずがたり』(1999年 小学館)、菊池靖彦・木村正中・伊牟田経久校注・訳『新編日本古典文学全集13 土佐日記 蜻蛉日記』(1995年 小学館)である。引用後の数字は(巻、頁数、行数)を示している。例えばI 203.06.011は巻1、6頁、11行目ということである。本稿では「末」「すゑ」を含む複合語も調査対象とし、同様に意味記述を行う。

### 3 「すゑ(末)」の用例数

『とはずがたり』の「すゑ(末)」の用例数は34例であり、「末」を含む複合語は「行く末」21例、「末つ方」4例、「末葉」3例、「末の代」1例、「葉末」1例となっている。一方、『蜻蛉日記』の「すゑ(末)」の用例数は6例、「行く末」6例である。二つの

作品における延べ語数は異なるものの（『とはずがたり』31,335語、『蜻蛉日記』22,400語）<sup>注1</sup>、単純に比較すると『とはずがたり』における「末」の用例数は、『蜻蛉日記』における「末」の用例数の約5.6倍となり、「末」を含む複合語も『とはずがたり』に種類・用例数ともに多く見られる。

#### 4 『とはずがたり』における「末」

『とはずがたり』における「すゑ（末）」34例を分類して、意味記述を行うと以下のような結果となった。

##### ① [(物の) 末端 端]

これは根元に対する先、物体や場所の端など空間的な意味・用法としての「末」の例を指す。これは全11例であり、全体の32.4%を占めている。

(1) 今よりや思ひ消えなむひとかたに煙の末のなびきはてなば (I 203.06.011)

(2) 夜離れなく見たてまつるにも、「煙の末、いかが」と、(I 208.09.009)

(3) 東の御方と二人、末の間にて、何となき物語して、(II 285.01.054)

(4) 契りこそさても絶えけめ涙川心の末はいつも乾かじ (III 362.12.014)

(5) 思ひ消えむ煙の末をそれとだに長らへばこそ跡をだに見め (III 388.10.044)

(6) 思ひ立つ心は何の色ぞとも富士の煙の末ぞゆかしき (IV 426.15.077)

(7) 雪さへかき暗し降り積もれば、ながめの末さへ道絶え果つる心地して、(IV 446.03.005)

(8) 待つとともまた憂き思ひの慰むにもあらず、越え行く山の末にも逢坂もなし」など思ひつづけて、(IV 474.01.041)

(9) する墨は涙の海に入りぬとも流れむ末に逢ふ瀬あらせよ (V 519.01.104)

(10) 事果てて空しき煙の末ばかりを見まらせし心の中、今まで世に長らふべしとや思ひけむ。(V 508.07.017)

(11) 白き箸のやうに元は白々と削りて、末には椰の葉二つづつある枝を二つ取り揃へて賜はると思ひて (V 523.10.161)

実際に目の前に存在する物体の端を指して使われるのは、(11)の枝の先を示す「末」の例のみとなっている。全体として和歌的表現として使用される例が多い。頻出するのは(1)

(2)(5)(6)(10)に見られる「煙の末」という例である。(2)は(1)の和歌を踏まえた表現であるが、煙の先という、今まさに消えていく頼りないものの例えとして繰り返し使われている。(7)の「ながめの末」は「眺望する先の方」「京極派の和歌に作例が見える和歌的表現」と新編全集の頭注(446頁 二)が指摘している<sup>注2</sup>。(9)も和歌の中での例である。自分が涙の海に入り流れていく先、と海の先にあるものとして瀬を設定しており、空間的な端として分類できるだろう。問題となるのは(4)の例である。「心の末」という表現は難解である。続く③にも「心の末」という表現は見られるが、この場

合は「いつも乾かじ」と続く表現、また直前の「涙川」から、涙川が心の「末」に流れているので乾くことがない、という癒えることのない悲しみを詠んだ歌と言えよう。つまり、心という空間の端に涙川が存在している、と解釈でき、それを踏まえるとこれもまた空間的な意味として分類が可能であろう。

## ②[子孫 跡継ぎ]

これは血筋の末、つまり子孫を指す意味としての「末」の例を指す。これは全部で2例見られ、全体の5.9%である。

(1 2) 我も我もと申し候へども、花山・閑院、ともに淡海公の末より、次々また申すに及ばず候ふ。(I 276. 14. 095)

(1 3) 思ひ出づるかひこそなけれ石清水同じ流れの末もなき身は (IV 435. 13. 018)

(1 2) は東二条院に対する後深草院の取りなしの手紙の中での例である。花山院家、閑院家が淡海公(藤原不比等)の子孫から続くことを示す。(1 3) は和歌での例である。石清水八幡宮の流れの「末」とは、石清水八幡宮が清和天皇によって創建され、清和源氏の氏神として尊ばれたことを踏まえ、源氏の流れをくむ子孫を意味している。

## ③[将来 未来]

時間的な「末」の意味・用法と言える。その中でもこの例は長期的な時間の中で見た際の先を示すもの、つまり将来や未来を指す意味での「末」の例を指す。これは全部で4例見られ、全体の11.8%である。

(1 4) 「よそながら馴れてはよしやさ夜衣いとど袂の朽ちもこそすれ 思ふ心の末空しからずは」など書いて返しぬ。(I 196. 16. 017)

(1 5) 契りおきし心の末の変らずはひとり片敷け夜半の狭衣 (I 197. 04. 025)

(1 6) 「恨みは末も」とて、絶えず言問ふ人にてはありける。(III 397. 11. 029)

(1 7) 花咲きたるを見るにも、心の末は空しからじと、頼もしきに、(III 405. 03. 008)

4例中、「心の末」が3例を占めている。(1 4) は二条が雪の曙からの恋文と贈物に対する返事である。歌に続けた一文に「末」は使用される。二条はこの返事とともに贈物を返す。雪の曙が自身を思う気持ちが将来まで続くか分からない頼りないものなので、贈物を受け取れないという思い故の行動である。(1 5) はそれに対する雪の曙の返歌である。雪の曙は再び先ほどの贈物を添え、二条の言葉を踏まえつつ、愛情を約束した自分の心は変わらないので、貴方の心が変わらないのならばこの衣装を着て欲しいと、「心の末」を二条の心の問題に切り返し使用する。(1 7) は神恩への願いを込め、自身の将来の心は頼りないことはあるまいという二条の思いの中の例である。「心の末」はいずれも、人間の心は揺れ動く不安定なものであるということを前提としていることがわかる。(1 6) の「恨みの末」もいくら恨めしいと思ってもいつまでも恨めしいと思う事はできないという「思ひかねなほ恋路にぞ帰りぬる恨みは末も通らざりけり」(千載・恋四)<sup>注3</sup>の古歌を引いての例

で、同様の前提があると見てよいだろう。いずれの例も具体的な到達地点が想定されているわけではなく、現在の時間と比較して変化が予想される将来、未来として認識されている。

④〔季節や月の〕終りごろ 末期〕

これも時間的な「末」の意味・用法であるが、季節や月といった決まった時間の単位の中での端、その時間単位の終わりの頃合いを示す例である。全部で11例見られ、全体の32.4%に当たる。

(18) 正月の**末**になりぬれば、「かなふまじき御さまなり」とて、嗟峨御幸なる。(I 214.09.010)

(19) 七月も**末**になるに、二十七日の夜にや、常よりも御人少なにてありしに、(I 222.04.038)

(20) 六趣を出づる身ともがなとのみおぼえて、またこの月の**末**には出ではべりぬ。(I 245.08.061)

(21) 誰が咎とか言はむと思ひつづけられてあるほどに、二月の**末**よりは御所さまへも参り通ひしかば、(I 255.04.012)

(22) かかるほどに、神無月の**末**になれば、常よりも心地も悩ましくわづらはしければ、(III 381.08.004)

(23) 明かし暮して年の**末**にもなれば、送り迎ふる営みも何のいさみにすべきにしあらねば、(III 402.07.037)

(24) またの年の睦月の**末**に、大宮院より文あり。(III 405.08.004)

(25) 十月の**末**にや、都にちと立ち帰りたるも、なかなかむつかしければ、(IV 453.13.002)

(26) 長月の**末**のとなれば、虫の音も弱り果てて、何を伴ふべしともおぼえず。(V 492.08.028)

(27) とかくするほどに、霜月の**末**になりにけり。(V 493.11.005)

(28) 如月の**末**にもなりぬれば、このほどと思ひ立つよし聞きて、(V 497.10.018)

この意味・用法の例は(18)の「正月の末」や、(19)の「七月の末」のように特定の月や期間を示す語に続く形で使用される。その示された特定の期間を、一つの単位に換算して見た際の「末」を示している。

⑤〔晩年 盛りを過ぎた時期 衰退期〕

これは生命の命など決められた時間に対して、終焉に近い期間を指す「末」の例である。

④における一定時間の末期から更に進み、具体的な意味合いを付していることが読み取れる例である。この例は1例のみで、全体の2.9%である。

(29) 「浅茅が**末**にまどふさがに」と書きたる硯の蓋に、(II 306.16.013)

参上を申しつけられたものの、忘れられてしまった女の後深草院の手紙に対する反応が語

られる場面である。新編全集頭注（306頁 六）では、「風吹けばまづぞみだるる色かはる浅茅が露にかかるささがに」（『源氏物語』「賢木」118頁）<sup>註4</sup>を引歌として指摘する。ここで主眼となっているのは変わってしまった後深草院の愛情であり、それを「浅茅が末」とし、「ささがに」は振り回される女を暗示している。単なる浅茅の葉末から進んで、盛りが過ぎた時期の浅茅と限定してもよいのではないだろうか。①の意味との掛詞とも捉えられるが、主眼となる意味はこちらであると思われるため、ここに分類する。

#### ⑥〔結果 結末〕

これも時間的「末」の意味・用法であるが、時間の単なる延長上としてではなく、何かの出来事が関わりたどり着く未来としての「末」の例を指す。③の〔将来 未来〕に、因果関係の意味合いが付加され、ある到達する一定の時間の地点が設定されているものである。この例は4例で、全体の11.8%を占める。

（30） 檣摘む暁起きに袖濡れて見果てぬ夢の末ぞゆかしき（Ⅱ298.05.021）

（31） 逃ることなければ、四方の社にかけぬるも、四方の社にかけぬるも、誓ひの末恐ろしき心地して、（Ⅱ343.10.048）

（32） 情けなく申したりけるも、御恨みの末も、かへすがへすよしなかるべし。（Ⅲ354.06.081）

（33） 恋路の末にはなほ関守も許しがたき世なれば、よしやなかなかと思ひ返して、（Ⅳ451.03.015）

（30）は有明の月が、二条の書き残した「夢」という文字に対し送った檣の枝に書かれた歌である。見果てぬ夢の「末」、つまりは有明の月と二条との恋の結末が知りたいという心情を籠める。（31）は四方の神社への誓いを破った際に起こり得る結果への恐れ的心情であり、（32）は二条が有明の月との関係を告白した後の後深草院の言葉で、つれない二条を有明の月が恨んだ結果、よくないことになるだろうと語る。（33）は二条が陸奥まで行きたいとは願うものの、恋の結末は関守も通すことは難しいのだから、と引き返すことを決める場面である。（30）同様に恋が迎える結末として解釈してよいだろう。③が現在に対する相対的な「末」であったのに対し、こちらの場合ほどの例も現在起こっている状況がどのような結果を迎えるのかが話題となっており、未来の一定の到達地点が想定されているのが特徴となっている。

#### ⑦〔末席 下位 下座〕

これは席や位の「末」、末席、下位を表す例である。1例のみで、全体の2.9%である。

（34） おしなべて塵に交はる末とてや苔の袂に情けかくらむ（Ⅳ466.08.039）

旅の途中で道を案内した度会常良に対する二条の贈答歌である。自身が尼であることを謙り、世間に生きる人々の末席に連なる身と表現する。

その他、「末」を含む複合語、その意味の分類は以下のとおりである。

○すゑのよ（末の代 名詞）

[仏法が衰えた末法の世]

（35）我濁世、**末の代**に生れたるは悲しみなりといへども、かたじけなく后妃の位に備はりて、(Ⅲ375.16.067)

○すゑつかた（末つ方 名詞）全4例。

[（季節や月の）終りごろ 末期]

（36）さるほどに、二月の**末つ方**より心地例ならずおぼえて、(Ⅰ254.10.004)

（37）二七日の**末つ方**よりよろしくなりたまひて、(Ⅱ300.14.027)

（38）卯月の**末つ方**のことなるに、なべて青みわたる梢の中に、遅き桜のことさらけぢめ見えて、(Ⅱ326.08.002)

（39）卯月の**末つ方**より大事に病み出だして、(Ⅳ434.08.045)

「末」の④と同様の意味であるが、「方」という方向、向きを意味する語が入ることにより、その時期の「末」を始点とする先のことを語る際に使用されている。(36)(37)(39)は病気の容体がその「末つ方」より変化していく様を示している。(38)は新緑の中の遅桜の描写であり、「末」より先の時期と示すことにより夏へ向かう季節に取り残された桜を焦点化している。

○すゑば（末葉 名詞）全3例。

[草や木の先の方の葉] 1例

（40）影宿す山田の杉の**末葉**さへ人をも分かぬ誓ひとを知れ(Ⅳ466.12.011)

[子孫 末裔] 2例

（41）奈良の方は藤の**末葉**にあらねばとて、いたく参らざりしかども、(Ⅳ453.15.011)

（42）契りありて竹の**末葉**にかけし名の空しき節にさて残れとや(Ⅴ517.10.023)  
2例見られる[子孫 末裔]の意味は「末」の②の意味から派生した和歌的な表現となっている。(41)の藤の末葉は藤原氏の子孫を示し、(42)の竹の末葉は新王家の子孫を示している。

○はずゑ（葉末 名詞）全1例

[葉の末端]

（43）更けゆくままに澄み昇り、**葉末**に結ぶ白露は玉かと見ゆる心地して、(Ⅳ449.06.008)

○ゆくすゑ（行く末 名詞）全21例

[進んでいく先 進んでいく方向]1例。

- (44) はるばる一通りは、来し方行く末、野原なり。(IV448.14.062)  
 [これから先 将来 前途] 20例。
- (45) 昨日の雪も今日よりは跡踏みつけむ、行く末」など書きて (I 196.06.012)
- (46) この身の事の行く末の見たさにこそとおぼえしさま、罪深くこそおぼえはべれ。(I 221.11.088)
- (47) 別れても三代の契りのありと聞けばなほ行く末を頼むばかりぞ (I 225.08.036)
- (48) 念仏のままにて終らましかば、行く末も頼もしかるべきに、(I 229.13.005)
- (49) いかにもはかばかしからじとおぼゆる行く末も推しはかられて、(I 239.04.017)
- (50) 過ぎにし方も行く末も、またあるべしともおぼえでよ。(I 243.09.053)
- (51) わが過ちの行く末いかならむと、(I 252.02.043)
- (52) 違ひざまも行く末いとあさましきに、(I 255.06.024)
- (53) つひに漏りやせむと、行く末いと恐ろしながら、(I 257.04.015)
- (54) 身の過ちの行く末、はかばかしからじと思ひもあへず、(I 260.08.016)
- (55) 「浅くなりゆく契り知らるる今宵の蘆分け、行く末知られて、心憂くこそ」とて、(III362.07.036)
- (56) つひにはかばかしかるまじき身の行く末をなど、(III369.04.047)
- (57) さても、二葉なるみどり子の行く末を、(III398.05.019)
- (58) 行く末をなほ長き世とよするかな弥生にうつる今日の春日に (III 415.05.006)
- (59) 行く末遠き君が御代とて (III420.12.009)
- (60) 心の内は、来し方行く末のことも、(IV461.01.048)
- (61) あり果てむ身の行く末のしるべせよ憂き世の中を度会の宮 (IV 473.01.023)
- (62) 行く末も久しかるべき君が代にまた帰り来む長月のころ (IV473.06.019)
- (63) いまだ四十にだに満ちはべらねば、行く末は知りはべらず、(IV480.12.006)
- (64) さても宿願の行く末いかなりゆかむとおぼつかなく、(V 533.06.030)
- 「行く(動詞)」+「末(名詞)」の繋がりとしても処理できるが、用例数の多さに加えて1例を除き他20例は全て、将来の意味として解釈できることから定形的な表現として項目立てした。[進んでいく先 進んでいく方向](44)はこれまで来た道の「来し方」と、これから進んでいく道の「行く末」を対比し並べている。残る20例は「末」の③の意味で解釈できるが、単なる「末」の場合は「心の末」「恨みの末」など、形を持たざるものが将来どのように変化するのか、ということに着目されていた。それに対し、「行く末」は自分や他者の身の行き着く先、将来を語る例が多い。(46)は発病した父が作者の懐妊を知り、泰山府君の祭り等の延命供養を施す様に対しての作者の心情である。自身

の懐妊の結果、つまり作者の将来を指している。(48)は念仏によって安泰となった自身の将来を指しての例である。また(58)の齡の祝いの歌の例は、これからも長く続く身の将来を意味する例である。「身」といった形あるものに使用されることが多いのが特徴である。「行く」という語が付属することにより、対象が積極的に動き、自ら変わっていくものという意味が強化されていると言えよう。

## 5 『蜻蛉日記』における「末」

前節の『とはずがたり』同様に、『蜻蛉日記』の「すゑ(末)」6例も意味・用法別に分類し、記述する。その際『とはずがたり』との違いを参照しやすいように、分類の番号は便宜上、前節と同様のものを使用した。つまり、ここで使用されない番号の意味・用法は『蜻蛉日記』には見られないことを示す。また、『蜻蛉日記』のみに表れる意味・用法については『とはずがたり』の場合の意味・用法分類番号の最後である⑦に続く番号を付し、黒塗りで示した。

すゑ(末 名詞)

① [(物の) 末端 端] 2例で、全体の33.3%を占める。

(65) 山の**末**と思ふやうなる人のために、はるかにあるに、ことなるにも、身の憂きことはまづおぼえけり。(II 238. 14. 121)

(66) 千代も経よたちかへりつつ山城のこまにくらべしうりの**すゑ**なり (IV 375. 14. 023)

(65)は兼家の贈り物に対しての作者の思案である。「山の末と思ふやうなる人」とは作者自身のことを指し、自分は山の奥に入ることを思う人、つまり出家を思う身の上であることを指す。(66)は巻末歌集内の和歌の用例である。銀の瓜破子に書き付ける歌として冷泉院に贈ったもので、世代を重ねてきた瓜の末のように、千代を重ねてほしいと願う歌である。瓜の「末」とは、弦の先端の方に身をつけた瓜を指し、実の生る時期が遅く、弦の先の方になった瓜である。

③ [将来 未来] 1例のみで全体の16.6%である。

(67) かけて見し**末**も絶えにし日蔭草何によそへて今日結ぶらむ (IV 372. 15. 015)

巻末歌集内の和歌の例で、為雅の女の元へ入道殿が通わなくなり、女の代わりに詠んだ歌である。かつては長く続くはずだった二人の将来が絶えてしまったという心情を詠む。過去に思っていた「末」は、具体的な地点が想定されていない漠然とした未来である。⑥の[結果 結末]と二人の恋愛関係の結果と見るよりも、③で見た方が適当であろう。

④ [(季節や月の) 終りごろ 末期] 2例で全体の33.3%である。

(68) …あはれいまはかくいふかひもなけれども思ひしことは春の**末**花なむ



散ると騒ぎしを・・・(Ⅱ178.14.068)

(69) なびくかな思はぬかたに呉竹のうき世の**すゑ**はかくこそありけれ(Ⅱ220.06.071)

『とはずがたり』同様に、特定の時間や期間を示す語に続く形で使用される。(69)は「うき世」の中でも末期の、積み重なった悲しみで嘆きの深い期間を指している。

### ⑧ [(和歌の) 下の句]

これは短歌の上の句に対して、終わりの七・七の二句である下の句を示す「末」の例である。1例のみみられ、全体の16.6%である。なお、この意味・用法は『とはずがたり』には見られない。

(70) いまひとたびせむとて、なからまではあそばしたなるを、『**末**なむまだしき』とのたまふなる(Ⅲ355.14.158)

兼道に返歌を送った後の、女房の言葉で、兼道が作者の歌に対してもう一度歌を返そうと試みたことが語られる。しかし下の句がうまくできないと、その断念を語るのである。

『蜻蛉日記』における「末」を含む複合語「ゆくすゑ」のみである。

○ゆくすゑ

[進んでいく先 進んでいく方向] 1例

(71) I 097.08.046 君をのみ頼むたびなる心には**ゆくすゑ**遠く思ほゆるかな

[これから先 将来 前途] 6例 (掛詞重複分1例含む)

(71) 君をのみ頼むたびなる心には**ゆくすゑ**遠く思ほゆるかな (I 097.08.046)

(72) われをのみ頼むといへば**ゆくすゑ**の松の契りも来てこそは見め (I 098.04.089)

(73) 曇り夜の月とわが身の**ゆくすゑ**のおぼつかなさはいづれまされり (I 129.04.020)

(74) 大空をめぐる月日のいくかへり今日**ゆくすゑ**あはむとすらむ (Ⅱ184.10.013)

(75) 行基菩薩は、**ゆくすゑ**の人のためにこそ、(Ⅱ219.15.031)

(76) ただいまのごとくにては、**ゆくすゑ**さへ心細きに、(Ⅲ279.04.005)

(71)は陸奥守として赴任する父が兼家に読まれることを想定し詠んだ歌で、自身のこれからの旅路と娘の将来の意味の「ゆくすゑ」で、掛詞であると考えられる。それに対し

(72)はその将来を帰京の暁に見て確認せよ、と返す。『とはずがたり』同様に、(73)の「身のゆくすゑ」や(75)の「ゆくすゑの人」の例のように、能動的に動き変化するものに対する将来の意味の例が多く見られる。

## 6 まとめ

前節までにおこなった「末」の分類を以下の表でまとめる。その際に、地の文、和歌、発言・手紙に分類し、それぞれの用例数を示した。なお、和歌の分類には引き歌の例は含んでおらず、引き歌は地の文に見られる場合は地の文、発言・手紙の中に見られる場合は発言・手紙の中を含めた。また、表に複合語は含んでいない。

	『とはずがたり』				『蜻蛉日記』			
	地の文	和歌	発言・手紙	計	地の文	和歌	発言・手紙	計
①(物の)先端 端	4	2	5	11	1	1		2
②子孫 跡継ぎ	1	1		2				
③将来 未来	1	1	2	4		1		1
④(季節や月)の終わりごろ 末期	11			11		2		2
⑤晩年 盛りを過ぎた時期 衰退期			1	1				
⑥結果 結末	2	1	1	4				
⑦末席 下位 下座		1		1				
⑧(和歌の)下の句							1	1
合計	19	6	9	34	1	4	1	6

二つを比較すると、『とはずがたり』における「末」の意味・用法の種類が多いことが明らかになる。基本的な意味は物体の端を指す①であるが、対象の範囲が空間、時間と、次第に拡大されていった。更に時間的な用法の中でも、時間の「末」ということから到達地点、末期という期間の指定からマイナスの意味も含む衰退期、と新たな意味の要素が付加されていった。時代とともに意味・用法が分化していく様を、両者の結果から見るができるだろう。『とはずがたり』における「末」は地の文での例が半数以上を占めているが、和歌や発言・手紙の中での使用が極端に少ないわけではない。④のみ全て地の文に現れているが、その他は地の文、和歌、発言・手紙に偏りがあるとは言えないだろう。④は時期を「正月の末」など、時期を特定する使用例であるため、地の文に多く現れるのは自然なことと思われる。

しかし、『蜻蛉日記』の場合は数が少ないとは言え、和歌の例が半数以上である。④もどちらも和歌の例であるのは興味深い。宮中での生活と諸国の旅の記録による回想録として構成される『とはずがたり』と、優れた歌詠みとして評価された作者が、夫を中心とした人間関係の様を、その中で詠まれた歌をとり集め構成した『蜻蛉日記』の性格としての違いがここにも見るができるのだろうか。このような意味・用法分類を蓄積させることにより、作品や作者、日記構成の方法の問題にも踏み込むことができるだろう。

### 【注】

1、『とはずがたり』の数値は高梨信博（2002年）『とはずがたり語彙表』（早稲田大学文学部高梨信博研究室）から算出。『蜻蛉日記』は宮島達夫、鈴木泰、石井久雄、安部清哉（2014年）『日本古典対照分類語彙表』（笠間書院）参照。

2、以下、頭注を示す場合は、久保田淳校注・訳（1999年）『新編日本古典文学全集47 建礼門院右京大夫 とはずがたり』（小学館）の頭注の該当頁と頭注番号を示した。

3片野達郎、松野陽一（1993年）『新日本古典文学大系10 千載和歌集』（岩波書店）

4 阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注・訳（1995年）『新編日本古典文学全集 2 1 源氏物語②』（小学館）

【参考文献】

入江さやか（2013）『『とはずがたり』における「言ふ」の意味・用法』『同志社国文学』第78号

入江さやか（2014）『『とはずがたり』における「申す」の意味・用法』『同志社国文学』第81号

石井久雄（2015）『『とはずがたり』全用語全事例辞典 寄稿』『同志社日本語研究』第18号

牧野さやか（2015）『『とはずがたり』における「かみ（上）」「うへ（上）」の意味・用法』『同志社日本語研究』第18号

入江さやか（2015）『『とはずがたり』における「聞こゆ」の意味・用法—「言ふ」「聞こゆ」「申す」「奏す」—』『同志社日本語研究』第18号

丸山健一郎（2015）『『とはずがたり』における「気色」の意味の定量』『同志社日本語研究』第18号

石田裕子（2015）『『とはずがたり』における動詞「とる」の意味・用法』『同志社日本語研究』第18号

入江さやか（2016）『『とはずがたり』における「思ひ」の意味・用法—『蜻蛉日記』と比較して—』『同志社国文学』第84号

【付記】

本稿は、科学研究費補助金による2010～12年度基盤研究(C)「とはずがたり全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究」(研究代表者石井久雄、研究課題番号JSPS 22520478)、及び、2013～15年度基盤研究(C)「蜻蛉日記全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究」(研究代表者石井久雄、研究課題番号JSPS 25370531)の成果の一部である。

# 『蜻蛉日記』における名詞「め(目)」の意味用法

城<sup>き</sup>阪<sup>さ</sup> 早<sup>さ</sup>紀<sup>き</sup>

同志社大学大学院博士後期課程

## キーワード

『蜻蛉日記』, 名詞, 目, 多義語, 意味用法

## 要旨

本稿では、『蜻蛉日記』における名詞「め(目)」を、意味用法によって分類し、その意味用法ごとにすべての事例を挙げた。『蜻蛉日記』には、「め(目)」が22例と「め(目)」を含む複合語が12例、あわせて34例が出現する。「め(目)」22例のうち、3例は掛詞で2つの意味が認められる。これらを重複して数えると、25例が認められる。「め(目)」の最も多い意味用法は、「目のはたらきをいう」で、25例中11例(44.0%)である。次いで「自分の目で実感するところ。出会う事態、境遇」という意味用法が7例(28.0%)みられる。これら2つの意味用法が、全体の7割以上を占める。

## 1. はじめに

名詞「め(目)」は、人の顔についている感覚器官の一つであるが、同時に「目は口ほどに物をいう」というように感情を表出するはたらきをもつ場合や、「ひどい目にあう」というようにその人が出会う境遇を指す場合のある、多義語である。本稿においては、平安中期の日記文学である『蜻蛉日記』において、「め(目)」にはどのような意味用法があり、その意味用法はどのような出現の偏りをみせるのかについて調査を行う。その結果として、全事例をあげて意味用法を記述する。

## 2. 研究方法

### 2.1 調査資料

本稿で使用する『蜻蛉日記』のテキストは、次の通りである。

木村正中・伊牟田経久校注・訳(1995)『新編日本古典文学全集 13 土佐日記 蜻蛉日記』小学館(以下『新編』と略す)。『新編』の底本は、宮内庁書陵部蔵御所本『蜻蛉日記』上・中・下の三巻である。『新編』には、下巻の巻末の拾遺として付載されている道綱母の歌集がある。この「巻末歌集」も、調査の対象とする。なお、佐伯梅友・伊牟田経久(1981)『かげろふ日記総索引』も適宜、参照する。

## 2.2 調査の手順

『蜻蛉日記』に用いられている名詞「め(目)」を、意味用法によって分類し、その意味用法ごとにすべての事例を挙げる。事例を記す際は、『新編』の本文で、「め(目)」が用いられている箇所を抜き出し、所在(巻、頁数、行)の順で記す。『新編』には、上・中・下の三巻に加えて、巻末歌集が記されている。これをIVとする。たとえば(II 244. 1)は、中巻 244 頁 1 行目ということである。

## 2.3 調査対象

本稿では、「め(目)」22 例を調査対象とする。22 例のうち、掛詞のために 2 つの意味をもつ例が 3 例認められる。掛詞の事例には、番号に(6※)のように「※」を付した。また、歌を引用する際には、詠者を丸括弧 ( ) で補った。

くわえて、「め(目)」を含む複合語の 12 語も調査の対象とする。「め(目)」を含む複合語の内訳は、「ひとめ(人目)」4 例・「めやすし(目安)」3 例・「めなる(目慣)」2 例・「みるめ(見目)」1 例・「ひとめふため(一目二目)」1 例・「ふためみめ(二目三目)」1 例である。

## 3. 『蜻蛉日記』における名詞「め(目)」の意味用法

### 3.1 名詞「め(目)」の意味用法による分類

『蜻蛉日記』における「め(目)」を意味用法によって、以下の 5 つに分類する。事例数は次に記した通りで、合計は 25 例である。これは、掛詞のために意味が 2 つ認められる場合には、それぞれを 1 例として数え、3 例を重複させて数えたためである(注 1)。

語の意味解釈は、『新編』の解釈に基づいて行う。また、意味用法を記述する際に、慣用句として用いられている場合は、積極的に記すようにつとめた。ここでの慣用句は、『日本国語大辞典』(第二版)・『時代別国語大辞典 室町時代編』・『角川古語大辞典』のいずれかに見出し語として立項されていることをもって認める。この慣用句には、波線を付して示した。

- |                            |        |
|----------------------------|--------|
| ①目のはたらきをいう。                | ——11 例 |
| ①視覚をつかさどるものとしての目           | ——1 例  |
| ②心情を表出するものとしての目            | ——5 例  |
| ③眠るはたらきをもつものとしての目          | ——5 例  |
| ②対象を見る目の向き。視線。             | ——5 例  |
| ③自分の目で実感するところ。出会う事態、境遇。    | ——7 例  |
| ④双六に用いる賽の面につけられた、一から六までの点。 | ——1 例  |
| ⑤網、籠、垣、筵などの、編まれた間にできた隙間。   | ——1 例  |

### 3.2 「①目のはたらきをいう」の事例

ここでは、「目のはたらきをいう」の意味用法の「め(目)」について述べる。25 例中 11 例(44.0%)で最も多い。以下、①視覚をつかさどるものとしての目・②心情を表出するものとしての目・③眠るはたらきをもつものとしての目の3つに分けて例を記す。

#### 3.2.1 ①視覚をつかさどるものとしての目

「視覚をつかさどるものとしての目」は、次の1例のみである。

(1)眠りもせられず、いそがしからねば、つくづくと聞けば、目も見えぬ者の、いみじげにしもあらぬが、思ひけることどもを、人や聞くらむとも思はず、(I 162. 12)

(1)の「目も見えぬ者」は、盲人をさす。ここでの「め(目)」は、「視覚をつかさどるものとしての目」の意味で用いられている。

#### 3.2.2 ②心情を表出するものとしての目

「心情を表出するものとしての目」は、5例ある。以下に例を記す。

(2)かくておはしますを見たまへおきて、まかり帰ること、と思うたまへしには、目もみなくれまどひてなむ。あが君、深くもの思し乱るべかめるかな。(II 245. 12)

(3)七月になりて、相撲のころ、古き新しきと、ひとくだりづつひき包みて、「これせさせたまへ」とてはあるものか。見るに目くるこちぞする。(I 110. 03)

(4)われも人も、物見る栈敷とて、渡り見れば、御輿のつら近く、つらしとは思へど、目くれておぼゆるに、これかれ、「や、いで、なほ人にすぐれたまへりかし。あなあたらし」などとも言ふめり。(II 212. 15)

(5)ものは言はねど、まだ心はあり、目は見ゆるほどに、いたはしと思ふべき人寄りきて、「親はひとりやはある。などかくはあるぞ」とて、(I 130. 14)

(6※)(兼家)浦の浜木綿 いくかさね 隔て果てつる 唐衣 涙の川に そほつとも 思ひし出でば薫物の このめばかりは 乾きなむ(I 119. 08)

まず、慣用句「めがくる」として用いられている例は、3例ある。(2)(3)(4)がそれである。この3例は、意味によって2つに分けることができる。

(2)について、現代語訳は「こうして山籠りしていらっしゃるあなたをそのままあとにお残して、山を下りて帰ってしまうなんてと思いますと、涙があふれて目もよく見えぬほどでございました」である。ここの「めがくる」は、悲しみの涙のために目がくらくなるという意味で用いられている。

(3)は、町の小路の女の縫物を、兼家が道綱母に頼んできた場面である。道綱母は、怒

りの感情のために「目くるるこち」がする、という。(4)は、大嘗会の御禊の行列に加わる兼家を見た場面である。道綱母は、天皇の御輿の近くにいる兼家の堂々たる姿を見て「目くれておぼゆる」と記す。これら2例は、激しい感情のために正気を失ってぼうっとなるという意味で用いられている。

次に、(5)は道綱母が母に死別した場面である。「目は見ゆる」とあるが、ここでの「め(目)」は「視覚をつかさどるものとしての目」ではない。『新編』の頭注には、「作者は放心状態になると、そこに置いてあるものも目に入らなくなることがあった(一〇五〆)。この時はそれほどではなかったのである」とある。105頁を次に引用する。

ただなりしをりはさしもあらざりしを、かく心あくがれて、いかなるものと、そこに  
うち置きたるものも見えぬくせなむありける。(I 105. 13)

引用部は、道綱母が、兼家と心が通い合わないためこのまま仲が絶えてしまうのではないかと、茫然とした状態になる場面である。この「ものも見えぬ」という表現を踏まえて(5)の「目は見ゆる」の意味を考えれば、意識がはっきりしているという意味と理解できる。ここでの「目は見ゆる」は、「めがくる」の「激しい感情のために正気を失ってぼうっとなる」の反対の意味と考えることも可能であろう。

最後の(6)は、兼家が道綱母に贈った長歌での例である。「このめ」は、「此の目」と「籠の目」との掛詞である。「籠の目」の意味については、後述する。『新編』の頭注には「『此の目』は兼家の目」とあり、現代語訳は「二人の仲が幾重にも隔たってしまった悲しみの涙で衣を濡らすことがあっても、昔のことを思い出せば、その思いの火で、この目の涙だけは乾くことであろう」とある。ここでの「め(目)」は、涙を流す悲しみの感情を表出するものとして用いられている。韻文ならではの用法であろう。

### 3.2.3 ④眠るはたらきをもつものとしての目

「眠るはたらきをもつものとしての目」は、5例みられる。以下にその例を記す。

(7※) 添へたる文に、「心さかしらづいたるやうに見えつる憂さになむ、念じつれど、いかなるにかあらむ、

(兼家) 鹿の音も聞こえぬ里に住みながらあやしくあはぬ目をも見るかな  
とある返りごと、(I 093. 03)

(8) いまはいとあはれなる山寺に集ひて、つれづれとあり。夜、目も合はぬままに、嘆き明かしつつ、山づらを見れば、霧はげに麓をこめたり。(I 132. 01)

(9) (道綱母) ましてや秋の 風吹けば 籬の荻の なかなかに そよとこたへむ をりごと  
とに いとど目さへや あはざらば 夢にも君が 君を見で 長き夜すがら

(II 180. 08)

(10)いかなる世に、さだにありけむと思ひつづくれば、目も合はで夜中過ぐるまでながむる、鶺鴒舟どもの上り下りゆきちがふを見つは、(Ⅱ 259. 06)

(11※)とある返りごと、

「(道綱母)高砂のをのへわたりに住まふともしかさめぬべき目とは聞かぬをげにあやしのことや」とばかりなむ。(Ⅰ 093. 07)

慣用句「めがあふ」として用いられている例は、4例ある。それは(7)(8)(9)(10)である。「めがあふ」は、上まぶたと下まぶたとが合う意である。二重傍線で示したように、4例とも打消を伴ってよく眠れないという意味で用いられている。

(7)と(11)は和歌の例で、掛詞である。(7)は、「山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつつ」(古今・秋上 壬生忠岑)を踏まえた歌である。『新編』の頭注に『あはぬ目』に『合はぬ目』(眠れぬ目)と『逢はぬ目』(恋しい人に逢えないつらい目)とを掛ける」とある。

(11)は、(7)の返歌である。ここでの「め(目)」は、眠るはたらきをもつものとしての目と、(眠ることのできない)つらい目、とを掛ける。なお、「め(目)」が動詞「さむ(覚)」と一緒に使われる慣用表現として、「めがさむ」「めをさます」「めぎむ」などがある。

### 3.3 「②対象を見る目の向き。視線」の事例

ここでは、「対象を見る目の向き。視線」の意味用法の「め(目)」について述べる。25例中5例(20.0%)が認められる。以下に例を記す。

(12)いみじう悲しうて、ありつるやうに置いて、とばかりあるほどに、ものしためり。目も見あはせず、思ひ入りてあれば、「などか。世の常のことにこそあれ。いとかうしもあるは、われを頼まぬなめり」などもあへしらひ、(Ⅰ 097. 15)

(13)いまはとて出で立つ日、渡りて見る。装束ひとくだけばかり、はかなきものなど硯箱ひとよろひに入れて、いみじう騒がしうののしりみちたれど、われもゆく人も目も見あはせず、ただむかひみて、涙をせきかねつつ、(Ⅰ 138. 09)

(14)いふかひなき心だにかく思へば、まして異人はあはれと泣くなり。はしたなきまでおぼゆれば、目も見あはせられず。(Ⅱ 194. 08)

(15)立てたるものども、みしみしと取り払ふに、ここちはあきれて、あれか人かにてあれば、人は目をくはせつつ、いとよく笑みてまぼりみたるべし。(Ⅱ 251. 05)

(16)六位なるものの太刀佩きたる、ふるまひ出でて来て、前のかたにひざまづきて、ものを言ふに、驚きて目をとどめて見れば、かれが出でて来つる車のもとには、(Ⅲ 357. 04)

慣用句「めをみあはす」として用いられている例は、3例ある。それは(12)(13)(14)である。「めをみあはす」は、視線を合わせるという意味である。二重線で記したように、3



例全てが打消しを伴って用いられ、「目も合わせない」という場面で使われる。

視線を合わせる場面では、(15)のように、「めをくはず」という慣用句が用いられる。兼家が道綱母に向かって目くばせをする場面である。

また、(16)は、「めをとどむ」という慣用句である。この「めをとどむ」は、注意して見るという意味で用いられている。

### 3.4 「③自分の目で実感するところ。出会う事態、境遇」の事例

ここでは、「自分の目で実感するところ。出会う事態、境遇」の意味用法での「め(目)」について述べる。25 例中 7 例が認められ、28%を占める。以下はその例である。

(7※) (兼家)鹿の音も聞こえぬ里に住みながらあやしくあはぬ目をも見るかな (I 093. 03)

(11※) (道綱母)高砂のをのへわたりに住まふともしかさめぬべき目とは聞かぬを

(I 093. 07)

(17)さいふいふ、ものを語らひおきなどすべき人は京にありければ、山寺にてかかる目は見れば、幼き子を引き寄せて、わづかに言ふやうは、(I 130. 05)

(18) (道綱母)榊葉のときはかきには木綿垂やかたくるしなるめな見せそ神 (I 150. 09)

(19)心もゆかぬ世とはいひながら、まだいとかかる目は見ざりつれば、見る人々もあやしうめづらかなりと思ひたり。(II 192. 14)

(20)わづかにためらひて、「いみじうくやしう、人に言ひ妨げられて、いままでかかる里住みをして、またかかる目を見つるかな」とばかり言ひて、胸の焦がるることは、いふかぎりにもあらず。(II 225. 02)

(21)山ならましかば、かく胸塞がる目を見ましやと、うべもなく思ふ。(II 255. 06)

慣用句「めをみる」として用いられている例は、6 例ある。それは、(7) (17) (18) (19) (20) (21)である。これらの「めをみる」は全て、…の目にあう、…の経験をするという意味で用いられている。うち(7)と(18)の2例は、和歌中にみられる。

前述の通り、(11)は(7)の返歌である。(11)は、「みる」を伴わないが、「めをみる」と同じ用法と考えられる。現代語訳には、「鹿で名高い高砂の頂あたりに住んでいても、そんなに寝覚めがちになるとは聞いていませんが」とある。下の句「しかさめぬべき目とは聞かぬを」は、「しかさめぬべき目(をみる)とは聞かぬを」と、「みる」を省略した表現とも理解できるからである。

### 3.5 「④双六に用いる賽の面につけられた、一から六までの点」の事例

「双六に用いる賽の面につけられた、一から六までの点」としての目は、次の1例である。

(22)「双六うたむ」と言へば、「よかなり。物見つくのひに」とて、且うちぬ。(I 146.09)

(22)は、双六の目の意味で用いられている。『新編』の頭注に『目』はさいころの目。『よい目』の意か」とある。

### 3.6 「⑤網、籠、垣、筵などの、編まれた間にできた隙間」の事例

「網、籠、垣、筵などの、編まれた間にできた隙間」としての「め(目)」は、次の1例である。

(6※)(兼家)浦の浜木綿 いくかさね 隔て果てつる 唐衣 涙の川に そほつとも 思ひし出でば薫物の このめばかりは 乾きなむ(I 119.08)

(6)は、前述の通り兼家の長歌で、「このめ」は、「此の目」と「籠の目」との掛詞である。薫物の籠とは、『新編』の頭注にあるように、「香炉の上に載せる金網の籠」のことである。ここでの目は、金網の籠の編まれた間にできた隙間を意味する。

## 4. 『蜻蛉日記』における「め(目)」を含む複合語の意味用法

### 4.1 「め(目)」を含む複合語の意味用法による分類

『蜻蛉日記』における「め(目)」を含む複合語は、計 12 例ある。その内訳と事例数、意味用法は、次の通りである。

「ひとめ(人目)」4 例

他人が見ること。他人が見て思うこと。世間の目。 —4 例

「めやすし(目安)」3 例

安心する。 —3 例

「めなる(目慣)」2 例

①しばしば見て、見なれる。 —1 例

②物事になれる。 —1 例

「みるめ(見目)」1 例

男女が会うこと。 —1 例

「ひとめふため(一目二目)」1 例

糸の重さの単位。 —1 例

「ふためみめ(二目三目)」1 例

糸の重さの単位。 —1 例

#### 4.2 「ひとめ(人目)」の意味用法

「ひとめ(人目)」は、4例が確認される。以下は、その例である。

- (23)ものしおぼえねば、ながめのみぞせらるる。人目もいと恥づかしうおぼえて、落つる  
涙おしかへしつつ、臥して聞けば、(Ⅱ193.01)
- (24)二なく思ふ人をも、人目によりて、とどめおきてしかば、出で離れたるついでに、死  
ぬるたばかりをもせばやと思ふには、まづこのほだしおぼえて、恋しう悲し。  
(Ⅱ208.02)
- (25)人目ぞいとまさり顔なく恥づかしければ、おしかへしつつ、明かし暮らす。(Ⅱ223.06)
- (26)そのころ、あがたありきの家なくなりになしかば、ここに移ろひて、類多く、事騒がし  
くて明け暮るるも、人目いかにと思ふ心あるまでおとなし。(Ⅲ304.04)

これら4例は、「他人が見ること。他人が見て思うこと。世間の目」という意味用法である。これらは全て、道綱母が人目を気にする場面で用いられる。

#### 4.3 「めやすし(目安)」の意味用法

「めやすし(目安)」は、3例が確認される。以下は、その例である。

- (27)やりつる人はちがひぬらむと思ふに、いとめやすし。(Ⅱ267.07)
- (28)「さは思ひしかども、助のいそぎしつるほどにて、いとはるかになむなりにけるを、  
もし御心かはらずは、八月ばかりにものしたまへかし」とあれば、いとめやすきここ  
ちして、「かくなむはべめる。(Ⅲ334.04)
- (29)いみじうをこなることになむ、世にも言ひ騒ぐなる」と聞きつれば、われは、かぎり  
なくめやすいことをも聞くかな、月の過ぐるに、いかに言ひやるらむと思ひつるに、  
(Ⅲ351.04)

ここでの「めやすし(目安)」は、道綱母の「安堵する」「ほっとする」「安心する」といった心情を表す語である。現代語訳は、3例に共通して、「ほっとする」とある。

形容詞「めやすし(目安)」は、次の例のように、人物や人物の装束に対して用いられる場合では、「見苦しくない。感じがよい」といった意味で用いられる。

参上させたまへば、いと目安く装束きて上りたまへり。

(『宇津保物語』国譲 下 297頁)

髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり。(『源氏物語』若紫 207頁)

『蜻蛉日記』での「めやすし(目安)」の例は、この意味用法から派生し、「体裁がよい。安

心できる」といった意味用法であると理解できる(注2)。

#### 4.4 「めなる(目慣)」の意味用法

「めなる(目慣)」は、2例認められる。以下にその事例を記す。

(30) 御灯明たてまつらせし僧の見送るとて岸に立てるに、たださし出でつれば、いと心細げにて立てるを見やれば、かれは目なれにたらむところに、悲しくやとまりて思ふらむとぞ見る。(Ⅱ209.08)

(31) 二十余日いとたまさかなりけり。あさましきことと目慣れにたれば、いふかひなくて、なにごころなきさまにもてなすも、(Ⅲ303.15)

(30)と(31)は、異なる意味で用いられている。(30)は『新編』「目なれにたらむところ」の頭注に、「この僧が、作者たちの世話などを行っている間に馴染みになって、親しみを感じてきたであろうところ、すなわち寺。『む』は僧の心中を推量したもの」とある。ここでは、しばしば見て見なれるという意味で用いられる。

一方(31)は、現代語訳に、「こんなあきれた状態にはもう慣れっこなっているの」とある。ここでは、物事になれるという意味で用いられている。

#### 4.5 「ひとめふため(一目二目)」と「ふためみめ(二目三目)」の意味用法

「ひとめふため(一目二目)」と「ふためみめ(二目三目)」は、それぞれ1例ずつ認められる。以下が、その例である。

(32) (章明親王)夏引のいとことわりやふためみめよりありくまにほどのふるかも  
(Ⅰ122.04)

(33) (兼家)七ばかりありもこそすれ夏引のいとまやはなきひとめふために(Ⅰ122.07)

(32)の返歌が(33)の歌である。(32)の『新編』の頭注に「『二妻三妻』に『二目三目』を掛ける。『目』は重さの単位」とある。同様に(33)の「ひとめふため」も、「一妻二妻」に「一目二目」を掛ける。二重傍線で示したように、和歌中に「いと」の語が詠み込まれており、「ふためみめ」「ひとめふため」の「め(目)」は、いずれも糸の重さの単位として用いられている。

#### 4.6 「みるめ(見目)」の意味用法

「みるめ(見目)」は、次の1例が認められる。

(34) 人わろげなる 涙のみ わが身をうみと たたへども みるめも寄せぬ 御津の浦は

かひもあらじと 知りながら (I 117. 11)

(34)は、道綱母が兼家への思いを書き連ねた長歌での例である。「みるめ」は、『歌ことば歌枕大辞典』によると、『海松布』の語例や短歌の用例は平安時代になってはじめて見られるようになるが、そのほとんどの例が『見る(目)』との掛詞、ないしはそれを踏まえた男女の逢瀬の暗喩として用いられるようになった」語とある。『新編』の頭注にも、「海藻の『みるめ』に『見る目』を掛ける」と指摘がある。現代語訳は、「みっともないことには、わが身をつらいと感じている涙が、湖のように溢れますが、こんな見る影もない私の所などにはおいでくださるはずもなく、はかない望みとは知りながらも」とある。

## 5. おわりに

以下に、本稿によって明らかになったことを記す。

- ・『蜻蛉日記』には、名詞「め(目)」が22例みられ、そのうちの3例は掛詞として用いられている。
- ・「め(目)」で最も多く用いられる意味用法は、「目のはたらきをいう」で、11例(44.0%)認められた。この11例を下位分類すると、①視覚をつかさどるものとしての目が1例、②心情を表出するものとしての目が5例、③眠るはたらきをもつものとしての目が5例であった。
- ・「め(目)」で二番目に多く用いられる意味用法は、「自分の目で実感するところ。出会う事態、境遇」で7例(28.0%)が認められた。7例中、6例が慣用句「めをみる」として用いられている。
- ・「め(目)」で三番目に多く用いられる意味用法は、「対象を見る目の向き。視線」で5例(20.0%)である。これらは、慣用句「めをみあはす」「めをくはす」「めをとどめる」として用いられる。
- ・「め(目)」には、「双六に用いる賽の面につけられた、一から六までの点」、「網、籠、垣、筵などの、編まれた間にできた隙間」を表わす意味用法が、各1例(4.0%)みられる。
- ・「め(目)」は、「めをみる」(6例)、「めがあふ」(4例)、「めがくる」(3例)、「めをみあはす」(3例)、「めをくはす」(1例)、「めをとどめる」(1例)といった慣用句として用いられる例が計18例ある。これは、25例のうち72.0%を占める。
- ・『蜻蛉日記』には、「め(目)」を含む複合語が12例みられる。その内訳は、「ひとめ(人目)」4例・「めやすし(目安)」3例・「めなる(目慣)」2例・「みるめ(見目)」1例・「ひとめふため(一目二目)」1例・「ふためみめ(二目三目)」1例である。うち、「みるめ(見目)」・「ひとめふため(一目二目)」・「ふためみめ(二目三目)」は、掛詞として用いられている。

## 【注】

1 掛詞のために2つの意味を持つと判断した事例は、(6)(7)(11)の3例である。(6)(7)(11)は、たとえば「まつ」に「松」と「待つ」の2つの意味をはたらかせるような掛詞ではなく、「籠の目」と「人の目」というように「目」の持つ異なる2つの意味をはたらかせる掛詞である。

石井(2013)に、次のような発言がある。質疑応答からの一部分ではあるが、以下に引用する。本稿では掛詞を2語として扱ったが、掛詞の事例数・意味をどのように処理するかについては、今後の議論が必要なところであろう。

石井:言語の線状性に反するが、掛詞は2語としたい。「ながめせしまに」なら、「ながめ」は一つの音連続だが「長雨」と「眺め」の2語が現れていると考えたい。語としてはそうしたいが、意味としては、0.5対0.5のようにしたい。掛詞の場合新しい一つの語として処理する方法もある。

2 参考までに、『日本国語大辞典』(第二版)・『角川古語大辞典』・『時代別国語大辞典 室町時代編』の「めやすし(目安)」の項目掲げる。

『日本国語大辞典』(第二版)

見苦しくない。感じがよい。体裁がよい。無難である。宇津保物語〔970～999頃〕国譲下「まうのぼらせ給へば、いとめやすく装束きてのぼり給へり」源氏物語〔1001～14頃〕若紫「髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり」徒然草〔1331頃〕七「命長ければ辱多し。長くとも、四十にたらぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ」

『角川古語大辞典』

- ①見た目に感じがよいさま。見苦しくない。「めやすきさまにさはらかに、あたりあたりあるべき限りしたる所を」〔源氏・東屋〕「これをいかにもしてめやすきさまならせむと思けるを」〔著聞・五〕「大かた、万のしわざはやめて、暇あるこそ、めやすくあらまほしけれ」〔徒然・一五一〕
- ②『徒然・七』に「命長ければ辱多し。長くとも四十にたらぬほどにて死なんこそめやすべけれ」とあることから、その文句取りで、川柳では早死にをよしとする意に用いる。「勘平はめやすかるべき一期也(三十二ナルヤナラズデ切腹)〔柳多留・四九〕「めやすかるべけれど死はまだ早シ」〔柳多留・一〇一〕

『時代別国語大辞典 室町時代編』

- ①見た目にいい感じだと思われるさまである。「げにわうじと申さんも、めやすくうつくしくとて、よろこびたまふ事がざりなし(短編=あまやどり上)「紙硯人にまいらせ候事。…夫なくては、ただまいらせ候が、めやすく候なり」(今川了俊札礼)
- ②見るからに安心できるさまである。「めやすき ただやすき事也」(匠材集四)「せめて十二三にもなりたまひ、いかなるかたへもありつけ、めやすきさまにもあるならば、なにおかおもひおく事のあるべき」(短篇=朝貞のつゆ)

【参考文献】

- 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編(1982-1999)『角川古語大辞典』角川書店  
中田祝夫・和田利政・北原保雄編(1983)『古語大辞典』小学館  
室町時代語辞典編修委員会編(1985-2001)『時代別国語大辞典室町時代編』三省堂  
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編(2000-2002)『日本国語大辞典』(第二版)  
小学館  
大野晋編(2011)『古典基礎語辞典』角川学芸出版  
久保田淳・馬場あき子編(1999)『歌ことば歌枕大辞典』角川書店  
宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉(2014)『日本古典対照分類語彙表』笠間書院  
木村正中・伊牟田経久校注・訳(1995)『土佐日記 蜻蛉日記』小学館  
佐伯梅友・伊牟田経久編(1981)『かげろふ日記総索引』風間書房  
阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳(1994)『源氏物語 1』小学館  
中野幸一校注・訳(2002)『うつほ物語 3』小学館  
石井久雄(2013)「多義語における意味の出現の定量化」(発表主旨及び質疑応答)『計量国語学』29(3)

【付記】

本稿は、2013～2015 年度基盤研究(C)「蜻蛉日記全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究」(研究代表者 石井久雄、課題番号 25370531)の成果の一部である。

同志社日本語研究 第20号 別刷

---

2016年3月31日発行

発行者 同志社大学大学院日本語学研究会  
〒602 - 8580 京都市上京区今出川通烏丸東入  
同志社大学大学院 文学研究科  
国文学専攻書庫受付  
doshisha.nihongogaku@gmail.com

印刷者 プリントステーション  
〒602 - 8580 京都市上京区今出川通烏丸東入  
同志社大学 良心館  
電話 075 - 251 - 4890  
win@lc-printstation.com

---



ISSN 2188-5656

(DOSHISHA NIHONGO KENKYU)

**DOSHISHA STUDIES  
IN JAPANESE LINGUISTICS**

**No. 20 OFFPRINT**

**March 2016**

**CONTENTS**

---

A Special Section on the *Kagero Nikki* Lexicon

ISII Hisao:	On the <i>Kagero Nikki</i> Lexicon	( 1)
	Papers on Wording of <i>Kagero Nikki</i>	
IRIE Sayaka:	Verb “ <i>kikoyu</i> ” (聞) and “ <i>mausu</i> ” (申)	(19)
MORI Akane:	Noun “ <i>suwe</i> ” (末)	(31)
KISAKA Saki:	Noun “ <i>me</i> ” (目)	(42)

---

(DOSHISHA DAIGAKU DAIGAKUIN NIHONGOGAKU KENKYUKAI)  
THE CIRCLE OF JAPANESE LINGUISTICS,  
THE GRADUATE SCHOOL OF DOSHISHA UNIVERSITY  
Address: The Graduate School of Letters, Doshisha University,  
Imadegawa-dori Karasuma Higashi-iru,  
Kamigyo-ku, Kyoto 602-8580  
JAPAN